史料翻刻

奥宮慥斎日記―明治時代の部（八）―

島　善高

解題

本稿には、奥宮慥斎日記のうち、明治七年一月一日から同年九月九日までを翻刻するとともに、旅行中の覚書「逆旅日記、明治七年五月～八月三十一日」を参考として翻刻した。架蔵番号は次の通りである。

①「慥斎日抄、十二月之部、明治六年十二月一日～明治七年五月十一日」（高知市民図書館「奥宮文庫」受入番号七―五四）

②「輶廻紀行、明治七年五月十一日～九月九日」（高知市民図書館「奥宮文庫」受入番号七―五五）

③参考、「逆旅日記、明治七年五月～八月三十一日、輶廻紀行ノ附属物」（高知市民図書館「奥宮文庫」受入番号七―五六）

九月十日以降、十二月三十一日までの日記は、残念ながら現存しない。

この間の慥斎は、教部省勤務と並行して、相変わらず村山・田内・森・弘田・仲・重松・沢田・西森・北代等の書生に『傳習録』や『文章軌範』などを講義しているが、注目すべき事柄の第一は、一月十五日条、翌十六日条によって、慥斎が「民撰議院設立建白書」の起草に関わっていたことが知られる点である。このことについては、既に拙稿「鉄舟と兆民と梧陰と」（梧陰文庫研究会編『井上毅とその周辺』木鐸社、二〇〇〇年三月、一七一頁）で紹介した。

次に五月十一日から九月六日まで、慥斎が岡山・広島・山口・鳥取・土佐などの地方を視察し、また僧侶神官の試験をしたり、地元の名士とあったりしている点も興味深い。とりわけ六月に永興寺の今北洪川と出会ったことは、慥斎の晩年に大きな意味を持っている。慥斎が出版を勧めた今北洪川著『禅海一瀾』は、まず明治九年

に山口県において昌興蔵版として出版され、次いで大正七年に森江書店から、そして昭和十年には岩波文庫から出版され、禅思想の普及に大きな役割を果たすことになった。

また明治八年、今北洪川は臨済宗総黌長として上京し、湯島の麟祥院に住するが、その洪川を中心に「両忘会」という座禅の結社が作られ、幾多の民間人が参禅するようになり、慥斎もまた参禅するようになる。これをきっかけとして、東京に居士禅が普及するようになった。

慥斎の日記には、政治や職務に関する記事はごく簡単にしか記録されていないので、慥斎とその門人たちが板垣退助らの自由民権運動にどの程度の関わりを持っていたのかは、定かではない。けれども、自由民権思想と禅との関係はもっと注目されてもよかろう。

（明治七年一月）

（欄外）

明治七年

一月一日、夜来有雪、庭除皆皓々、晏起、喫雑煮被酒又眠、走児告官辞拜賀、終日播帙自慰

今朝も猶雪降としのこゝちして　閨の埋火かきも起しけり

二日、雪、晏起無事、積雪殆三寸、楼上遠眺絶佳、東濱田八束

賑ハしき高楼いかに賤かやも　雪の玉水響こと也

八束又送和文章付歌、有信機上雪之詠、晩豊田生来、命飲、楼上小酌、西姪亦来話、夜月色奇明、雪眺亦妙

三日、雪、餘寒甚、不出、僅浴、帰途轉却、晩利岡武之来、命飲、終夜話、遂宿、是日會田屋嫗来

四日、晴、早起、着常禮服出省、第二時前退食、往還皆命小車、晩無事、稍暖夜無事

五日、微陰、寒、晏起、是日賜宴、余以事辞不出、擁炉看書、會田屋老嫗来、談金銭事、是日閑無事、若大熊義雄来、則須行談會田屋云々

六日、晴、暁起、五時正治帰、出張所、命馬車、價二圓三方云、是

日休暇、村山田内二生来講義、森生来問正治事、午後招飲自濱田八束、音曲老人等来会、弄琵琶月琴胡弓長笛、興甚、予与八束詠國雅、高某賦詩、且飲且談

氷なし篠筈池のこゝろをも　和らけ初つ今日の絲竹
いと竹の自からなる調ニハ　のきの玉水聲あはすなり

七日、晴、早起、出省、未見一人、八時二十分也、永坂所労不出、大丞召足達及予、命当局分課、稍省事務、晩退食、訪蒲生氏不在、夜蒲生来小酌、嘱児事

八日、晴、出省、無事、返諸課回冊、永坂不出、齋藤返社寺課、晩喫牛乳五勺、付与弟書於郵便

九日、朝微雨点々、早起九時出省、是日別局事務章程定、教職黜陟取調、外此如従前、晩訪蒲生不在、付書翰、夜會田嫗来談、豚児書来云、八日発高崎、六日夜八時衝泥中、帰衙廨、寒威北地最烈云、健吉来付二分（二人割用云）、即帰

十日、晴、出省、無事、永坂未出、晩命車帰寓、北代忠（正）臣返来旧詩稿

十一日、晴、寒沍、朝諸生来、講傳習録及文章軌範、弘田生所率来、皆共慣義塾生徒也、午後散歩、遂尼括来暫話、晩一酌、濱田八束来話

十二日、陰、出省、無事、宿直与大谷権大録、夜頻書来、不能眠

十三日、微雨、退食、獨酌散歩、夜山田喜久馬来、談事

十四日、晴、出省命車、退食、迂路訪板垣氏、観外人所駁木戸建言書、夜命車帰、云是夜有人刺岩倉公

（欄外書込）
迎年言志
石とのミ捨たらむものか璞の　研ケハ光る御代にあふ身ハ
又
死おくれ生残りてし老か身の　かひある春そ今年也ける

十五日、陰寒、出省、云昨夜之変事世情洶々、退食後命車、至後藤氏高輪邸、坐客既満、副島氏由利氏已下猶数名皆談昨夜之事、議事畢、命西洋酒飯、夜半辞出、風雪如織、命車帰

十六日、雨滂沱、朝書生来、為講傳習録及文章軌範、午牌命車、赴岡本健三之会、諸人皆会、改刪昨所論文稿、明日将出議院、因浄写三通、夜帰

十七日、陰、告疾不出、裁書信付郵便、是日閑無事、晩西姪来宿、話時事

十八日、晴、寒、猶養痾不出、早朝訪蒲生弘嘱事、終日擁炉看書、午後児女輩浴草津温湯、晩田邊生来、弘田生亦来話、云訪宮崎辰吉、夜西姪来宿

十九日、沍寒倍昨、弘田生来、共看新聞、既載十四夜事、且記旧参議建言（東京日々新聞）、有暴徒被逮（逮）之説云（武市某々々等凡五名）、東岡本氏、托明日社友事、借覧雑書数種

百事夢断大槐宮、蒼古誰如十八公、茶味相親千里話、水声纔隔一橋風、獨来獨去雲無跡、双是双非道有中、載得新詩今夕外、人言野鳥叫空々　　鷲嶺鞜谷（大龍寺与州宇和島人、寓金地院）

念日、寒、告官不出、早朝宮崎生来話、晩西姪来、浴湯、夜無事

念一日、晴、稍暖、朝講義、午牌清水重華来、齎月金（七十円）、小栗憲一有書云、明日返金十五円、晩過仲生夜児女輩聴話家、獨守寒燈閲新聞、稍静閑、是日西姪寓芝金地院大龍寺鷲嶺鞜谷許

廿二日、晴、出省、無事、校職員録、付与小栗憲一於金七円二方、残金追テ払筈、明廿三日　皇上指揮兵隊、勅奏判官拜観ト、余清水生ニ托ス、禮弟船便ニ木綿一反贈来、書状添、小堀生来

廿三日、晴、是日於日比谷門外調練場　天皇陛下午前十時自授旗於兵隊、勅奏判官員皆拜観、此儀予以疾不出、晩浴後訪蒲生子、微醺、夜無事

廿四日、晴、出省、無事、晩迂路訪宍戸大輔於九段坂、托轉課事、日晡辞帰買飯、夜無事、閲新聞、云暴徒凡八名已就捕縛、又云旧参議建言殆見採用、今日書信書一通於郵便、答禮弟昨年念五日之書

廿五日、晴、出省、無事、是日又返考証課、晩無事、夜谷生見訪

廿六日、寒沍大風、不出、講義諸生来、晩萩原生来、送利息一円一方ト五匁於大熊義雄、大工関某来、約明日屏修理、得男正治本月念四出発、高崎柳川町百二十三番地

廿七日、晴、出省、列考證課中、又校文書開板与石尾孝基聯几坐、是日招魂社賽祭、大小輔等早退食、予亦随退、無事、婢往中橋、夜帰

廿八日、晴、寒、出省、無事、校諸陵実検考、晩帰、大工日雇二人来、営繕屏

（欄外書込）

返官本四種、俗神道弁、本教大基、釈教正謬、初破富國捷径

廿九日、晴、寒、出書信於高崎、出省、無事、午後三時発疝痛、乃告疾帰臥、車中痛発、帰家稍弛、晩宮崎西森姪等来、夜不甚痛、雨蕭々

三十日、寒、不出、擁衾看書排遣、終日閑無事、付大工金五円、東西姪書郵便中付

（欄外書込）

濱田へ祝詞講義執中抄ヲ返ス

三十一日、微陰、養痾、未出、閲新聞紙為慰、腹中痙攣未癒

（欄外書込）

百四十九号、六年真事誌十一月四日米國新聞

瑞典王后ト共ニ一日同車「ハマール」市街ヲ通行ス、□□（汚損）群集充満セリ、王其傷害ヲ恐レ、車ヲ緩進セシムニ、十二歳児馬ニ踏倒サル、王急ニ車ヨリ飛下、抱其児入家、侍医ヲシテ療セシム、医大傷ナラサルト云ヲ聞テ侍者ニ児ヲ托シ、然後乗車去ル云々

西姪来、付与岡本生書、美霽、未得漫歩、晩重松生来、云今日至自本縣、廿四日発浦門、一日淹浪華

（明治七年二月）

二月一日、晴、会書生講傳習録、仲生来話、夜重松生来宿、火池端茅町

二日、晴、無事、午後浴草津温泉、処々探梅花散歩、谷中村落帰、夜写草稿一二葉

三日、霜霽暖、無事、晩得高崎正治之書信昨所発、是日詣従四位旧知事公、夜無事、泉文齋書数種来

四日、晴、小瘡稍痛、擁炉看書、西姪来話

唐憂候彪之益州新昌ノ懸令タリ、雞卵一銭ニ三顆ナルヲ、十千ヲ以三万卵ヲ買付、里ニ属シテ孚嫗シ、一雞ヲ三百文ニ賣、半年ノ間ニ九十万銭ヲ得タリト、又竹筍ヲ五莖一銭ナルヲ、十千銭ニテ五万莖ヲ買、條達シ竹トナルヲ待テ賣ル、五十万銭ヲ収ムト云々

五日、晴、無事、終日擁衾看書、付与男正治書於郵便、児女輩今日詣水天宮

六日、暖、朝講傳習録、午後与濱田氏浴草津温泉、半日閑無事、帰路頗憊疲、晩蒲生氏来訪

七日、晴、風埃満街、出省、無事、婢適中橋、付四圓、云阿升播名之祝

八日、晴、出省、無事、帰路伴島田蕃根至門別、隣家木村氏来、談地主清水謹二地代倍増之事、夜火土橋近辺

九日、晴、稍暖、告疾不出、西姪来話、浴草津温泉、迂路千駄木村探梅、村趣野味可掬

冬ハまた深しと思ふをいつしかニ　春しり初る梅の初花

猶数首口占、皆忘却、晩帰寓、本省伴来云、可返官本、乃付古史通二同或問二併四本、餘則在省中、或問則前日借坂崎生、昨日、折簡通生、未返来、出井老人来、談宅地税金事、夜濱田八束見示電信報、云本月七日午後一時発福岡縣、八日夜達、同八日午前二十分発、今九日午前十時五十分達大蔵内務両省、云佐賀縣参事五日夜脱走、征韓党練兵、福岡縣乞備五百人、佐賀党派三、一征韓党、屯学校、一曰封縣党、屯宝林坊、凡兵二千五百人許、又曰條理党、佐賀参事抵三潴、々々権参事昨日渡馬関、福岡則静平也、立木縣令請事急為指令云々、福岡権参事、夜遣健吉於坂崎生促返書

十日、陰、晩雨、午後四時訪北代正臣於築地備前橋、云生被命西征、随大久保内務卿、来会者数名、中有林大丞（半七）者、無恙近日帰自西國、初信傳聞説之謬傳、因詳西陬動静、夜雨甚、且飲且談、至夜分燭見跋猶不已、投宿

十一日、新霽、猶在北代生許、午前十一時辞帰、得禮弟二月一日之書、一月十七日之報也、借覧修身論及龍溪全集

十二日、晴、朝西姪拜命文部十二等出仕、入第四大区学区局、晩

［以下欠カ］

十三日、夜来大雪、推戸皚々、奇寒砭骨、擁炉看書、晩東北代正臣、付上内務卿上書、夜無事

十四日、晴、出省、無事、返金七円二方於小栗憲一、有稟状

十五日、晴、奇寒風埃、出省、無事、澤田生来自横濱、乃付紙苞、夜乞借宿、得男正治本月十四日書、平安也、昨十四日、大久保内務卿及六名発船、赴西國

十六日、風、講傳習録、書生三人、沢田生辞帰、拉二女散歩墨蛇堤上、処々梅花已発、遂到梅若塚辺、春光已可観、帰途入梅荘、一老樹已爛漫、遊人亦来看夕陽已春、乃呼渡帰喫雁鍋、浴後就寝、憊甚、婢今日帰自中橋

十七日、寒、出省、云西州已開戦争、有電報、云十五日佐賀鎮臺兵与激党接兵、又云薩公奉命就國、昨日発軔

十八日、暖、出省、無事、閲大陽［ママ］暦辨説茨木縣商上原信之著、其説鑿々有徴、借来熟覧

十九日、晴、出省、無事、坂崎斌来話、云

吾妻（出羽人カ）至誠正男卜云者アリ、十三年山籠リ、人死テ魂ナシト云ヲ発明スト云々

廿日、晴、出省、是日傳電、云十八日大久保利通公船滞在神□(戸カ)、□

廿一日、夜来暖、宿直、夜春陰、田内与西姪来、講傳習録、婢又下宿、出潮江返書

廿二日、晴、出省、物集高見傳三島大丞旨、促予任布教事、予辞不肯

廿三日、雨、衝泥命車出省、遇三島大丞、談布教之事、云不必強也、晩又買車帰、雨終日頗蕭然

廿四日、寒、告疾、無事

廿五日、寒威倍昨、擁衾看書排遣、河本生来、堤正勝来訪暫話、聞西州官軍捷音

廿六日、晴、朝訪佐々木司法大輔、不在、又訪宍戸大輔暫話、遇澄川氏、帰自三大区、因聞旧縣風教之概、夜無事

廿七日、晴、出省、無事、西姪来話

廿八日、晴、訪佐々木大輔托事、出省、明日征討将軍東伏見公発軔云、澤生来省邂逅、稍暖、明日教院詰橋本氏共也、二児退塾云

（明治七年三月）

三月一日、微陰、早朝廣田生闖戸来、云将往西國、今日発船、匆々話別、九時田内生来、講傳習録二三條、十二時命車、赴芝説教、途歴新橋、兵隊将出、観者如堵、云是日征討将軍東伏見公、卒兵西征故為行軍、午後聴説教二坐、拜嘗神酒、将雨、便又命車帰来

二日、夜来雨蕭々、命車、出省、無事、未後帰又命車

世界偶像ヲ拜スル者大約六万万人

回教フィ〳〵　一万二千万人　猶大デコス　五百万人

希臘キリシヤ　五千万人　天主カトリック　一万三千五百万人

邪蘇キリスト　一万万人

倫敦邪蘇宗ニ於テ出産女児ヲ挙ル百人ノ内私生十六人

法理斯ニ天主教ニテ百人ノ中私六十三人ト云

三日、新霽、出省、無事、琴平宮司深見并宮崎富成等来訪

四日、稍暖、出省、晩南風

五日、陰、出省、無事、晩雷初発声、驟暄不正、気候可怪、報答弟正路二月念日書、又答正治本月三日書、皆付郵便

六日、大風霾、朝田内生来為講傳習録、午後招飲(同僚)于小中村清矩、因宴下谷梅園、七八名且飲且談、不知風埃満街、主人有國雅、云、

開け行御代ニたくひて梅の花　香も新らしき國の春風
余亦
散梅の花の吹雪ハ寒からて　空ニしられぬやとの春風

七日、新霽、出省、無事、晩婢帰来

八日、雨、告疾、夜得江口西森妹書信、得昨七日所発正治書信

九日、陰、稍暖、今日猶養痾不出、晩浴薬湯

十日、寒、雨、命車、出省、与同僚等議官弊社訂定事、云外務省問此事、讀新聞、横濱新聞有外人議神道一條

十一日、寒、早朝有火両國西畔、婢久仁帰中橋、重松生来、是日風甚、終日不出、擁炉写書、成稿神武紀私講

十二日、晴、出省、無事、有匿名書、議吾輩真児戯不足掛歯牙、夜拉児女輩浴

十三日、霜霽寒冱、得北代生西國捷書、退食、与同課赴小栗憲一、招飲於糊溪元園丁（廿二番）、夜帰

十四日、晴、出省、無事

十五日、晴、出省、無事

十六日、微陰、休暇、命車（大マコ）、訪岡内重俊（ツキノ事）於向両國、不在、留書辞去、雨甚、第一無用ノ者ハ我朝ノ年号ナリ、大化ヨリ明治ニ至迄凡二百三十ヲ記憶スル事最難シ、不便利ノ第一ナリ、既ニ神武紀元二千五百三十四年トスレハ年号ハ廃シテ可ナリ

十七日、雨雪、寒甚、告疾

十八日、寒、猶未癒

十九日、晴、出省、無事

二十日、陰、晩小雨、出省、得正治十七日発大宮駅書、云十三日移秩父郡大宮駅検事支局、一山間僻邑也、鍋屋東右衛門ト云モノ、一室ヲ旅寓トスト、月ニ三圓二方ノ宿料ト云、是日禀月金七十円

二十一日、陰、時微雨

二十二日、雨雪寒冱、命車、出省、無事、晩復命車帰、讀弘仁歴運記考弘仁歴運記収延喜式首巻

二十三日、大寒風雪、告腰痛、養痾、午後大風雨、終日擁衾看書

二十四日、新霽、稍暖、猶養痾、未後豚児俄然帰省、云一昨日命帰京、今日従川越直到東京云、小畑生見訪暫話、仲生来話、約構書

二十五日、陰後雨、告疾不出、児出省告帰京、雨終日不歇

二十六日、稍欲霽、休暇、萩原生来訪、暫話辞去、浴後散歩池邊、初桜欲発

二十七日、雨、命車、出省、無事

二十八日、雨、出省

二十九日、雨、出省

三十日、冒雨、出省、晩宿直

三十一日、新霽、朝自直帰、晩浴後観花東台上

（明治七年四月）

四月一日、晴

二日、晴、出省、無事、風埃

三日、晴、出省、風埃

四日、暖

五日、暖、出省、無事、澤田生来

六日、晴、午牌俄然騒雨狂風、須臾便歇、招飲同課中僚友都八名、石瓦島田粟田三人不来、澤田生来宿

七日、晴、出省、無事、草神道大綱改竄、裁郷書正路弟

按本紀等諸書昔者天津彦火瓊々杵尊初従降始王西土、次彦火々出見尊、次彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊揔三代、経一百七十九万二千四百七十餘歳、竝時世邈遠事迹神異具于旧記、更不煩述（弘仁暦運記）天地未生ノ時、天虚ニ天御中主アリ、此神ノ霊ニテ一物ヲ生（赤縣ノ古説之ヲ上皇太一ト云、一万八千歳）、次ニ高皇産霊神皇産霊ノ二神アリ、此二霊ニヨリ一物始テ二ニ分判シ、天地ト成ル（彼ニ盤古真王大元聖母ト云、天地ノ成定迄一万八千歳）次ニ天地已ニ成立終時、上ノ三神諸冉二神ニ天瓊矛ヲ賜ヒ、世ノ中ノ事ヲ始ム、是ヲ元年トス（彼天皇地皇二氏、甲寅ノ暦運ニ当ル、其末年ハ癸丑ニ当レリ）、二神大八洲ヲ生、蒼生ノ祖タル八百万神又万物ヲ生、然後風火金水土ノ神等造化ヲ掌ル神ヲ生ム、冉神薨シテ泉ニ入、諸神天照大神ヲ日向ノ橋小門ニ生ミ天日國ヲ任シ、素盞嗚ニハ此大地ヲ任シ、自ハ日少宮ニ上ル（彼傳ニ天皇地皇相俱ニ甲寅ヨリ一万八千ナリ、然レハ此末年モ癸丑ナリ）故ニ照皇ハ無究ニ天日ヲ治メ、素尊ハ此御國ニ坐テ四方八方ノ蕃國ヲ併テ尽ク治ム（雲州樋河天測記ニ暦数二百三十四万四千六百五十年ノ昔ト云、下ニ天照皇大神即位甲寅、至今大永三年癸未也ト、是赤縣ノ古説ニ合ヘリ、照皇高天原ヲ治ル元年、素尊天下ヲ治ル元

年、俱ニ皆甲寅ナリ、素尊天上ニテ誓中子ヲ生スル、中ニ八島筱兄神、其子ニ天葺根神、其子ニ大國主神、斯テ後素尊遂ニ黄泉ニ入リ月読尊ト成彼ニ八皇氏ト云、即素尊也、天地二皇ニ、紹テ御世ノ間三千三百歳元年ハ甲寅也、扨素尊月読ト化後、子篠見、孫葺根、曾孫大國主ト御世此間久ケレハ、子孫亦高年共ニ造國ノ労ヲ素尊見玉ヒ、大國主生テ後泉ニ入泉ニ入年亦癸丑、其後大國主八十神ノ枉難ニテ又泉ニ入、素尊ノ威霊ヲ受テ現國ニ還リ八十神ヲ追チ、大國主トナル運ヒナレハ、素尊ノ次大國主ト云ンモ誣サル也、故ニ大國主ヲ直ニ素尊ノ子ト云傳ヘリ素尊入泉癸丑ナレハ大國主ハ甲寅ナリ、大國主ノ子言代主嫡子トシテ百八十一子アリ、又事代主ニモ子孫曾孫玄孫数多アリ、十七世ノ神代ト云傳所謂経世治氏漸皆此大神ノ制作大抵世ノ風俗赤縣ノ唐虞以前ノ趣ニ開ケタリ云々

八日、晴、出省、無事

九日、晴、告疾不出、午後拉女児散歩、遂到飛鳥山、迂路観瀑川不動尊

十日、晴、暖甚、午後散策、歩墨田堤上、晩帰、澤田生来宿

十一日、雨、終日不出、看書且眠、讀明六雑誌、於我結学術文藝会社、是為始会者凡四人、

第一号

洋字ヲ以テ國語ヲ書スル論西周、讀同書ノ論西村茂樹、開化第一話森有礼、陳言一則西村茂樹、民撰議院設立建言書之評森有礼

十二日、冒雨出省、有第四学区巡回之命、各区亦有命、第一区川口寛、第二区（以下欠）

十三日、雨、出省、与旧巡回人某々等談事、磯村山田川口斉藤尾越五人、晩婢下宿

十四日、新霽、出省

十五日

十六日、晴、拉児観劇於蛎街、雨氷

十七日、晴、告疾、晩歩東台、東照宮賽日、観古書畫於林松院、島田蕃根亦適来観、相与賞観古書畫、遂於楼上晩酌、且談論、夜二更帰

十八日、出省、寒風埃甚、晩田内逸雄来、托刑志及神道大綱、夜無事

十九日、晴、出省、明朝十時参教院、講究課中、巡回新旧皆会云

日本書紀顕微宗紀（十五―二十四代）ニ阿閉臣事代奉命往任那、有於壹岐對馬間月神託宣、我祖高皇産霊有預鎔造天地之功云々、宣長已来、天地創造説ノ根元ハコノ文ヲ證シテ神カ開闢ノ天地ヲ創造スル能造主ナリト見シ痼疾ヨリ、古事記開巻ノ天地初発之時ノ六字ヲ天地未分ノ位ト一定シ、次段ノ葦牙萌騰ノ文ニ至テ天地ヲ造産シ玉フト説、斯葦牙カ萌騰リテ天トナリ、萌遺リタルハ地ト成ト決定ス云々、先書紀ヲ解スルニハ此一部首尾ヲ能観ルヘシ、抑舎人王月神ノ託宣ニ神カ天地ヲ創造スルトアル文ヲ知リツ、何（カ）ソ此託宣ニ背キテ同紀開巻ニハ天地成而後神生其中ト云天地之中主一物化為神ト云ヤ、親王ヨモ一書両談ヲ筆シ玉フヘカラス、宣長ノ説ノ如ク解セハ、親王ヲシテ一口両舌ナラシムルニ至ル、書記ハ書記ヲ以テ一貫スヘキコソ正説ナレ、加之月神天地ヲ創造スル程ノ大功ヲ告玉フナラハ、事代ノ任那ヘ往路中差掛リテ托宣セストモ京ニ在天皇ヘ直ニ御告アリテ然ルヘシ、今何ノ必用アリテ藪カラ棒ノ託宣ヲシ玉フヤ、此ハ高皇産霊ハ皇孫天降ニ付テ皇國ノ國土ヲ預シテ平定鎔造マシ〳〵テ降シ玉フ國土鎮撫ノ大功アル神ナレハ、事代任那ヲ鎮定スルニ就テ高産霊ニ民地ヲ奉ハ任那平定福慶ナルヘシト云意ニテ、神カ開闢ノ天地ヲ創造スルトノ事ニハ非ス、且預字近人ハヤクヨリト仮名ヲ指ス牽強也、古本ニハ預（ソヒ）ノ仮名アレトモハヤクナト云事ハナシ、又天地ヲ造ルホト早キ時ハナケレハ、コノ預字ナクテモ聞ユル文也、親王何ソ無用ノ預字置ヘキヤ云々、佐々木肇十一説弁

二十日、晴、早起、九時牌命車赴大教院、試験生徒十五名、旧新巡回人ニ皆会、最後真宗分離論、熱田宮司某与真宗某々四名論之、未後命車帰、至本省禀月給、婢返来

二十一日、晴、休暇、訪佐藤晃於平戸旧邸、暫話、観先師肖像、一七十時、一則八十八、七十時最為善肖、椿山畫之、賛則先師自筆、晩麻生末廣祠官中村光枝来訪、話移晷去、云八十一齢矍鑠可壮、夜早寐

二十二日、出省、無事、帰路訪堀秀之、聴先巡回話、風埃満街、観学問勧四編五編

二十三日、雨、出省、又開別局、与旧巡回官員合議、晩雨甚、夜無事

二十四日、出省、無事

廿五日、晴、出省

廿六日

廿七日

廿八日、出省

廿九日、出省

三十日、晴、拉児女観藤花於亀戸、帰途雷雨、歩泥路帰家

(明治七年五月)

五月一日、拉児姪輩観書畫展覧会於大学校、午後四時宴会同僚於川長

二日、晴、出省、無事、退食、招飲足立氏、同僚皆赴、満醉夜帰 *寮三個月々金百十圓*

三日、晴、出省

四日、晴、赴大教院検査、晩婢下宿

五日、晴、出省、薄寒、帰途訪齋藤氏、観書畫

六日、晴、寒、出信書郵便、是日宿直与山下政愛倶也、夜無事、終夜剪燈看新聞

七日、微陰、帰自直、無事、微雨不出

八日、微恙、告官、無事、雨滂沱

九日、晴、出省匆忙、明後々十二日発途云、今日宿直以近発途被免

十日、晴、出省

十一日、晴、早起、是日発東京、欲赴山陽山陰八縣、乃買小舟達本船、是夜六時半発横濱、夜風雨、過遠洋、船飄兀不堪

長阿含経曰、火災過已、此世還欲成時、従光音天命終、来生此間、皆悉化生、歓喜為食、身光自照、神足飛空、安楽無礙、尓時、無有男女尊卑上下、亦無異名、衆共生世、故名衆生、自然地水出、凝停於地、猶如醍醐、時地味出、亦復甜如蜜、衆生以手試嘗知為何味、遂生味着、嘗之不已、遂生貪着、便成揣食々之不已、時、衆生身体麤渋、光明轉滅、無復神足、不能飛行、時、未有日月、天地大闇、其後久々、有大暴風吹大海水、深八万四千由旬、両披飄、取日宮殿云々、又仏告比丘曰、初衆生食地味、其食多者顔色麤悴、其食少者顔色光沢、然後乃知形皃優劣、互相是非、懐諍競故、地味銷竭、又地皮出状如薄餅、衆生又食之、々々多者麤悴、少者光沢、互相是非、故地皮銷竭、後有地膚出、衆生食之亦復如前、而銷竭後、有自然秔米、無糠糟、衆生共取秔米食之、其身麤醜、始有男女形、互相膽視遂生慾想、遂為婬佚不善法轉増、為自障蔽、遂造屋舎、遂造城云々　北郷談菱川信近著

近年英理学家斯密士(スミス)在其國発見今陸地之上古為海底云、又理学家太尓文(ダーウィン)説此地球初成也、其質不硬、恰如水母生、時有如葦芽者、而如

水母者粘之、以成其形　同上

西洋除創世記之外有二古書、一曰唹唉喇通尓澳撒士耳（ウエーリツルオームスサル）、一曰奥児別士篤利（オールビストリ）、此二書似セテ於創世記、西師不使生徒看之云、其唹唉—有称亜細亜東部之傳者、摩西拠此書演述創世記云々云々、甲某曰、彼称亜細亜東部者、我古説之西播者、而其説之所以不同者縁筆者修潤色已、乙某曰、彼称亜細亜東部者、謂蒙古也、而我古説者、在昔神人之所齎也云々、愛國之情、盖天神命之於人者、苟無之非人、然此情一偏倚則所見自狭不知真理、而妄成説其所以愛國者、適足以辱國、故古書不強作之説為可、云々

西洋三大教猶大耶蘇回教是也、摩西書於猶太教之流、著創世記一変其教、其千百五十年後、耶蘇亦出於其教自称上帝之子別開一宗耶蘇釘死後、歴五百余年、有摩哈麥者、起於亜拉比亜参酌猶太耶蘇二教新立回々教、皆拠創世記云

理学家曰、人者狂々之化成也、非亜当厄襪之孫也、（英理学家太尓文説云、方世未有人類之前、有一種大獣、其大獣化生為各種之獣、其毎化生、粗者為精者猴族有数種、化生為狂々、自狂々化々生々遂為人類矣）

開明学者曰、凡古傳之在文字以前、而傳諸口碑者轉誤多矣、有文字後、筆口碑於書者亦有加文飾或陥怪誕者、然略足以稽往事矣、又曰、凡世記開闢之事及神人昇降乎天等者、皆荒唐誣罔、固無論焉

近時有傳欧米老成之言者曰、凡世称宗教者後世必廃棄矣、又曰、不称教法、別有明倫之一科学而可興焉、（或曰、近年英國等之有識者、多執法公多之駁悉滴夫教説云）由是観之彼教亦将為糟粕矣

耶蘇曰、吾毀此殿三日而復建、言死而三日復活也、又曰、凡樹非我所樹者、将抜其根言禁異教也、語多此類　○説愛望信之三徳

又曰、愛我可極於無加愛人無異於愛巳○祝石而為餅、祝残餅而予之数千人、而猶拾餘屑七籃、或話死者蘇病之類、得十二門徒傳心秘蹟（サカラメント）（彼徒之秘術有使深信其道者見天神死神、是愚民之所以蠱惑也、其天神所謂天使而有羽翼者邦俗所云天狗之類、乃知、昔役行者等所使役者）

道雖近不行不至、事雖小不為不成

八千矛の神の尊、あかおほくに主こそハ男にいませは打見る島

（表紙）

「輶廻紀行　明治七戌年五月至　草」

（表紙見返）

台湾　湯島天神　第五大区七小区上野西黒門町

フオルモサ　中坂下　十四番地

宇都野正武方　権大録堀秀之

雲一匁五十文即五厘

百文ト云ハ三厘

一貫ハ三銭　下谷の宿をいつる頃思ふことあり

おもふこと忍ふか岡の葉桜の　もみつる時を待むとすらん

（欄外札貼付）

「号　六十四才

輶廻紀行九□巡廻ノ紀行

明治七年五月至（カ）九月九日」

（欄外）明治七年

輶廻紀行甲戌

五月十一日、晴、余第四大学区ノ巡回ヲ命セラレ、午前七時半東京下谷ノ僑居ヲ離ル、次児健吉ヲ拉シテ小車ヲ命シ京橋下ニ抵ル、蒸気問屋云、直ニ霊厳島ニ至ルヘシト、乃端舟ヲ買品川本船ニ達ス、西姪送テ此ニ至ル、訣別ス、本船千里丸ト云、紀國ノ郵便船ナリ、時午前十一時半直ニ纜ヲ解、横濱ニ至リ午飯ス、四時間碇泊ス、下等中央ニ眠ル、雜沓甚シ、午後八時発船ス、雨岑々至ル、夜分雨益豪風亦烈、篷底ニ臥テ知ラス

十二日、雨又風午前八九時尤甚シ、云遠洋ニ掛ルト、飄兀スト雖トモ船迅事飛カ如シ、舟中多注気アリ、健亦甚シ、予ハ未タ注意ナシ、然レトモ立テ徘徊スル能ハス、亦食ヲ欲セス、夜ニ入テ風濤益猛ナリ、船中皆湊泊ヲ望ム、船将云、九時迄見合セテ大島ニ入ルヘシト、一客強テ入ラン事ヲ論ス、船将盖鋭意ニ船ヲヤラントス、遂ニ入ラスシテ馳過ク、余眠テ知ラス

老の浪寄るも忘れて遠近江　七十の灘をまたも過けり

六十までうき世の浪にゆられ来て　七十の灘は物としもなし

十三日、雨、暁寤テ聞ケハ既ニ紀洋ニ掛ルト、穂波坐スルカ如シ、一船稍蘇ス、始テ破顔笑聲アリ、風順汽烈、午前十時半神戸ニ達ス、小船ヲ買揚陸、海岸通ノ吉川屋逆旅ニ投ス、拉児浴後散歩ス、遂ニ楠社ニ詣ツ、川蒸気和合丸ノ周旋人来、云晩二時此ヲ発シ鞆浦ニ至ルト、乃約乗合セテ六圓ナリ、船遅シ、云浪華ヨリ暇アリ、夜八時過汽舟来、直ニ乗ス、上等客八九人有、女児盖妓ナリ、喃々冗語ス、稍風生則人聲皆寂タリ、児女輩注ス、健児モ稍狎レテ注意ナシ、舟中處々島嶼ヲ観ル、多ク趣アリ、一々名ヲ問ニ懶シ、出羽人三人一所也、夜分十二時過キ解纜ス、眠テ知ラス

十四日、晴、暁起傍人ニ問ヘハ江島ニ近ツクト云、小豆島ニ沿フテ馳ス、余十二日頃ヨリ腰痛ス、起居甚艱ム、盖シ千里丸船中曲臥鞠躬セシヨリ起レリ、痛ヲ忍テ甲板上ニ上リ島嶼ヲ観ル、応接暇アラス、一々名ヲ問ヘト随聞随テ忘ル、余此間ヲ往来スル数回多ク夜間夢中ニ過ク、今日ノ如キナシ、客中ノ一適ナリ、午後四時タトツニ達ス、客多ク上陸ス、盖シ琴平ニ詣ツルナリ、七時後鞆津ニ達ス、小舟ニテ揚陸、港上ノ逆旅ニ投ス（廣鳩屋勘兵衛）、小田縣吏来テ客ヲ点検ス、盖佐賀ノ残党ノ故ナリ（小田縣吏田中泰助）、浴ナシ、吏云宿ニ浴アリ、即往浴ス、早ク寝ネ安眠ス

十五日、晴、早起、船ヲ買テ小田懸ニ渡ル、渡中雨至ル、午後三時漸ク小田ニ達ス、潮退ク、磯ヲ廻リテ市街ニ入、宿ヲ投ス（大形屋左平次）、仲ノ丁第一大区小一区ナリ、懸廳及ヒ戸長ヘ届書ヲ出ス、夜按摩来リ腰脚ヲ揉ミ、且鍼治ス、当下稍快ヲ覚フ

十六日、新晴、腰痛未タ已マス、蓐上ニ呻吟ス、中教院ニ柬ス、福永本龍別所亮迪来晤ス、粗中教院ノ事情ヲ聞ク、暫話辞去、未後痛

稍快、街頭ヲ散策ス、亦小繁華ナリ、夜無事、早寝ス

十七日、晴、早起、午前九時後懸廳へ往キ、権令矢野光儀参事益田包義ニ遇フ、予腰痛ヲ以テ直ニ辞去ル、杉山権中属（当縣人）毛利（米沢人）権中属松島史生ノ三士来晤ス、今朝モ来訪ノ由、途ニテ違ヒシト云、本省六ヶ条ノ款ヲ示談ス、暫話時晷ヲ移ス、随分教義ニハ尽力ノ模様ナリ、巡区ノ教師ト云ヲ置テ、闔区ヲ巡回セシメ、人民ヲ説喩セシム、初メ國体ヲ知ラシメ、然後時体ヲ知ラシメ、粗其体裁ヲ覚フル寸ハ巡区ノ任ニ充ツ、巡区ノ時ハ区戸長臨席ス、聴衆百人已下ナリト、然レトモ十分ナラスト云々、今朝昨日ノ福永、別所両名モ来訪ス、予カ寓ノ狭陋ナルヲ憐テ槌屋源次郎ト云逆旅ニ換ン事ヲ謀ル、午後散歩シテ海岸ニ至ル、痛処アルヲ以テ早ク帰ル、晩槌屋ニ移ル、稍家宏壮ナリ、且別荘アリ、然レトモ扱ハ麁ナリ、先逆旅ヘ祝義ヲ遣ス

十八日、晴、早起、無事、権宮司大石如雲来晤ス、晩村井真孝来ル、中教院ニ至リ観ル、甚佳景ナリ、殊ニ海望無比、坐上浮家泛宅ノ如シ、生徒ノ名簿八十名計、上等ハ既ニ洋学ニ通ス、進歩想フヘシ、四神ヲ菅廟ニ祭ル、即拜ス、晩餐後港辺ヲ繞リ散歩ス、夜蚊出不眠

十九日、朝微陰後晴、午前十時比懸廳へ往、令ニ遇ヒ事ヲ談ス、毛利権中属周旋ス、杉山ハ遇ハス、云午後一時中教院ニ於テ黒住派ノ者五名ヲ試験スト、午後一時果シテ伴来ル、健吉ヲ拉テ往ク、杉山権中属毛利権中属史生松島等前ニ在リ、取締ノ僧侶福永等出迎フ、神官モ村井大石二名来会ス、黒住五名ヲ試験ス、一番ニ妹尾清三郎ヲ験ス、大ニ怔忡シ、調カネタリ、次ニ同名和重郎辨論稍聴ニ堪タリ、次ニ別府宮原若林等皆難兄弟ト云ヘシ、試後質問半秒時間、難者亦佳ナラス、試験師ハ天地哲雄津田明海ト云、畢テ散去ル、昨来新聞ヲ借覧ス、東京日々新聞六百四十二号（三月廿四日）サンフランシスコ、ハルテインノ新聞ニ日本現在并ニ未来ト題スル一條アリ、已前モ讀シカ今復讀、到此頗ル慨然ニ堪ヘス、因テ畧抄例ノ卑論ヲ付セント欲ス、亦夙病也

夜掲燈猶新聞ヲ看ル、初テ蚊張ヲ張ル、安眠到暁、是夜按摩ヲ呼不来

二十日、晴、早起、又右腰ニ痛ヲ覚、或疑傷冷毒ナルカ、然レトモ痛処轉セシハ愈ノ兆ナルカ、按摩ヲ呼療セシム、前ノヨリハ稍工ナリ、午牌福永本龍来、云今日試験者既ニ遠方ヨリ来集スト、初余痛処ヲ以テ辞セント思ヒシカ、甚気毒ナル故、午後一時ヨリ力疾院ニ赴ク、試者六名皆僧侶ナリ、昨ヨリ或ハ可ナルモアリ、然レトモ皆田舎生ナリ、試補ノ遙任アリシト云、姓名別具、晩五時過事了返ル、行歩甚艱ム、夜又説教アリ、態々催セシ由ナレハ辞スヘカラス、又勉テ行、余独リ椅子ニ凭リ蒲団ヲ敷之ヲ聴ク、二名終ノ一名稍佳ナリ、天地某ト云、十時過会散、帰寝、微雨

廿一日、新霽、早起痛依然タリ、莨蒻ヲ以テ蒸貼ス、按摩ヲ雇ヒ療セシム、トカク功ナシ、終日眠、蓐上只新聞ヲ讀ミ悶ヲ遣ル、一室ニハ醉客雜沓、藝妓絃歌如湧、可厭又可楽、個ノ喧囂中ニ在テ頗ル従前ト殊味アルヲ覚フ、健児ハ他ニ出ツ、新聞類ヲ返璧ス、氣海観瀾廣義博物新編訳義等借来、健等ト共ニ讀ム、夜無事、近旁散策、更深テ盲僧来按摩ス、安眠

廿二日、新霽晏起、痛未タ已マス、医三村氏ヲ延テ診セシム、云レオマチス毒ナリト、即擦剤一壜散剤五帖ヲ投シ去ル、擦剤ハ痛処ニ塗ル、香竄樟脳又菊油ノ気アリ、午後一時例ノ試験ナリトテ迎来ル、僧侶三名ヲ試ム、皆極頑ナリ名別具、沼名前宮司千賀通世来ル、遅延ヲ責ム、大石如雲為メニ来リ謝ス、浴後又眠ル、閑無事也、徒刑者ニ遇テ道中ノ路程ヲ問フ、云吉備津迄十一里也ト云、吉備津宮司村井真孝此ニ至ランヲ請フ、予亦吉備津ヲハ預テ詣テンヲ欲スレハナリ、夜無事、按摩セシム、料壱朱二度分遺ス

廿三日、清和天如拭、午前家書ヲ作リ郵便ニ付ス、十三日神戸より出せしハ甚略也、今日ハ尤詳也、筆下例ノ國雅二三章ヲ賦ス

立寄ていさやくらへむ白髪山　わか俤と何れまさると

きのふ見し上野のさくら飛鳥山　けふの青葉の蔭やいかなる

猶有レト忘レタリ、村井真孝来晤ス、身滌規則ヲ贈ル、大石如雲亦来、暫話辞去、今日も稍痛を覚へ頻ニ塗薬ス、晩権令矢野光儀ヲ訪、疾ノ由ナレハ直ニ辞出、参事益田包義ヲ訪、云明日備前街道ニ路修理見分トシテ出郷スト、暫話辞去、杉山権中属ヲ訪、暫話ス、医云山陰ヲ後ニナシ、先藝辺へ行カハ疾ノ為メ佳ナリト、杉山モ亦慫恿ス、因テ決策ス、然ルニ家書ニテ北條へ今月末今来月行筈ヲ報ス、因又書ヲ作リ報知セントス、夜説教アリ、例ノ臨席迎来即往、神官井口某藝ノ真宗僧正善寺二人説教ス、藝僧稍弁アリ、聴衆七八十人計、永代経トカ云式ナリト云、是日医三村来胗

廿四日、清和氣爽然タリ、早起稍腰軽キニ似タリ、頻ニ塗薬ヲ抹塗ス、午後児ヲ拉テ海岸ヲ散策ス、海眺絶タ佳ナリ、港口ヲ繞リ帰ル、殆ント困倦ス、帰臥稍痛ヲ覚フ、健吉ハ説教ヲ聴ニ行ク、余往カス、其由ヲ云ハシム、晩医来胗ス、云丸剤ニ替ルト、小水ヲ試ム、白色ヲ帯レハヨシト、未タ白ヲ見ズ、服薬ハサフダ剤ト云尿ニ取ル法ナリ、夜無事、早ク寝ス、権令ヨリ新聞日誌等送致セラル

廿五日、晴、朝無事、真宗浄心寺藝ノ正善寺清原得音二名来訪ス、村井真孝千賀通世等来話、是日終日新聞等ヲ看不出、腰痛依然タリ、医師来胗丸薬ニ代ヘ用ユ、夜雨蕭々

廿六日、朝雨、杉山権中属来晤、暫話辞去、又看新聞、云臺湾ヘ先陣(雌)三艘既ニ到着ス、西郷都督ハ未タ在崎ト云々、支那上海ノ電報ノ由也、晩散歩中教院ニ至ル、休暇人ナシ、皇学局ヲ過ル、亦無人、福永天地等来話、別所進級之事ヲ話ス、地方ト協議シテ具状スヘシト云、夜大雷雨甚、村井真孝伊木忠行来晤、伊木所労ニテ遅延ノ

由、因テ六ヶ条ノ協議ヲ示喩ス、更深雨稍歇、雷亦収マル、二名辞去

廿七日、新晴、舟ヲ買テ備前尾ノ道ニ航セントス、拮据匆々、権令矢野光儀及杉山毛利松島等来リ別ヲ送ル、権令ハ酒菓ヲ贈ラル、礼意慇懃報スルニ由ナシ、午前十時遂ニ分袂ス、港上又神官村井大石千賀伊木等送来、別ヲ惜ム、舟已発セントス、僧侶数名来、遥ニ送別ス、神ノ島ノ南畔ニ小碇泊シ、午飯ス、美日無風船進マス、漸日暮ニ至テ鞆津ニ小泊ス、港上ノ泉水山ニ上リ眺ス、韓人日東第一勝地ト称セリト云、時夕陽正ニ沈マントシ、島嶼点々一鏡中ニ映対ス、余紙ヲ展、鉛筆ヲ以テ大模ヲ写セントス、殆ント恍然不能着筆、只畫師ヲ伴ハサルヲ憾ムルノミ

畫くとも筆やハ及ふ梓弓　鞆のみなとの夕くれの空

只近年新ニ家ヲ建テ正面ヲ遮ル、頗殺風景ヲ覚フ、沼名前社ニ詣ツ、頃日仮遷宮ト云、山ヲ下リ港上ヲ散歩ス、舟子鯛ヲ買ヒ烹ル、調味拙ト雖トモ亦鮮美ナリ、篷底麁飯美魚亦漁楽ニ似タリ、但予以疾断酒ヲ憾ルノミ、夜ニ入テモ風逆、潮亦順ナラス、夜半眠テ知ラス、風ト目覚テ暁鶏ヲ聴、人家ノ近キヲ覚フ、窓ヲ拓ハ既ニ尾道ノ港ニ泊シ、舟子モ困眠セリ、直ニ起シ宿ヲ投セシム

廿八日、晴、棄舟、宿ヲ港上ノ逆旅ニ投ス（東原屋佐介）、浴後市街ヲ散歩ス、小田ニ比スレハ頗ル繁華ナリ、然ルニ市街ハ皆新築ト云、寺院多クハ宏壮ナリ、千光寺ト云石山ノ半腹ニ一勝処アリト云、例ノ奇癖ニ堪ヘス、午後腰痛ヲ忍テ登臨ス、児ハ既ニ今朝登観スト云、寺僧ヲ叩ク、倒履、本堂ニ延ク坐上近傍諸勝ヲ縮聚ス、不覚絶叫奇哉々々、殆ント泉水山ニ勝ル幾層、韓人偶未知之耳、寺僧急ニ近傍ノ僧侶ヲ会シテ示諭ヲ乞ハントシ周旋ス、余亦他日過ルニ懶ケレハ此旨ヲ諾シ、遂ニ時宗ノ一廃寺ニ神官僧侶ヲ召會シ、例ノ旨趣陳述ス、凡十一名、晩猶宿迠二三名来訪、云匆々失礼、因テ菓ヲ献セント、余固辞謝絶ス、僧等悵然トシテ去ル、夜九時比又買舟テ廣島ニ船ス（乗合押切舟ナリ）、雨至ル、掩篷眠ル、何処ヲ過ルヲ知ラス、然ルニ点滴蕭然頗客況アリ

終夜篷のひまもる雨雫　老の袂に包みかねたる

猶呻吟中数首詠タレトモ忘レタリ、舟中雑客紛々、舟子俚歌ヲ唱ヘ終夜揺櫓、如泣如訴、亦一種風調ナリ、且聴且眠、余三十年来此興味ナシ、嘗テ山陰道中梅雨夜、東京之歌吟海ヲ想像セント云シカ、既ニ此舟中ニアリ、於此放翁ノ詩真味アルヲ覚フ、凡物其境致ヲ嘗メサレハ真味ヲ知ラス、現成公案殆ント秀得了ニ似タリ、詩歌ノ情有テ句ヲ着クヘキナシ、悵然良久之、證得放翁詩句好、七年夜ノ雨不曽知ト、只言ノ様ニ獨吟スルノミ、穴哀々々

廿九日、暁夢未タ覚メス、人聲耳ニ聒スルヲ聞ク、猶雨蕭々タリ、且聴且夢ム、何處ヲ過ルヲ知ラス、漸日丈ケテ小便ニ行、目ヲ洗四方ヲ眺ス、烟雨濛々中島嶼出没、大米ノ真法アリ、乃拓窓随問随忘ル、午前小漁村ノ前ヲ過ル、即舟ヲ寄ス、小用浦ト云蜑戸二三十余、漁家ニ就テ便ス、魚蝦ノ舟ニ生遊スルヲ見ル、溌溂ノ状可観、

乃舟中之ヲ買テ午飯ヲ侑ム、魚蝦賎如土、烏賊十二頭ヲ煮、舟中皆喫飽ス、客十名舟子ヲ併テ十二名也、例ノ狂吟

小用ニ小用ノ浦へ立寄テ　烏賊サマ甘ク腹もはりけり

満坐皆笑フ、音渡狭ハコレナリト指教ユルニ、窓ヲ開キ観ル、如何ニモ浄海ノ威権可想ナリ、浄海ノ墳ト云、石華表立タリ、真墓ハ福原ニコソ有ケレ、然ニ此ニ祭ル尤宜也、浄海亦豪傑ナル哉

名ニ高く聞渡りてし安藝の海や　音とのせとを今日見つるかも

浄き海に渡し救へる功をハ　よも舟人の忘れさるらむ

晩雨益暗く、廣島の川口ニ入シ頃ハ又岑々タリ、三丁目ノ橋とカ云処ニ舟ヲ維キ揚陸ス、第一大区五小区五十二番地吉川金蔵ト云宿ニヤトル頃ハ夜ニ入タリ、古湯ニ浴シ寝ヌ、亦快眠ス

三十日、新霽大風、早起、無事、縣廳及戸長ヘ柬ス、午前九時半縣廳ヘ出ツ、雨森精翁ニ會フテ諸事談ス、権参事白濱貫礼ニモ面接シ、粗旨趣ヲ陳シ、且自記ノ一篇ヲ示ス、精翁云、午後教院ニ会セント、立野権中属村上弘ナトニ遇フ、暫話辞去、返寓雨森氏ヲ待ツ、午後一時過果雨森と村田良穂二名来訪、直ニ辞テ教院ヘ行、余後ヨリ往ク、浅野権少教正忠及ヒ精翁良穂ト几ヲ聯テ事ヲ談ス、教正ハ本月十五日東京ヨリ帰ルト云、院中ノ教導職八九名ニ接ス、明後六月一日重立シ教職ヲ会スル筈ナリ、因テ旨趣ヲハ談セス、暫話辞返ル、晩児ヲ拉テ市街ヲ散策ス、繁華可駭、寓ニ返テ休憩ス、太疲憊且腰稍痛ム、夜無事、早寝ヌ、快眠不知暁

三十一日、晴、朝閑無事、午前祠官某々等来訪、多謝絶ス、浅野静夫一人ニ遇、近況ヲ聞ク、是日腰稍痛ヲ以テ教院ニ行カス、例ノ市街ヲ散策シテ行飯ス、今朝初杜鵑ヲ聞ク、客況アリ、然レトモ吟哦ノ口ヲ杜タリ、例ノ狂吟モナシ、宋人句アリ、云、自笑近来詩力減、只将日暦録陰晴、縣廳ヨリ新聞紙数種ヲ送致セラル、終日且讀且眠、楼上新緑更加、頗有涼意、夜漫歩、街頭頗繁華、恰モ浪華夜市ノ如シ、物ヲ買早ク寝ヌ、暁目覚タルニ初テ新鵑ヲ聴ク、客況云ン方ナシ

子規初音くれしと思ひしハ　たひの寐覚をしらぬ也けり

なくさめて汝ハ訪ふとも郭公　老のねさめハこゝろして啼け

（明治七年六月）

六月一日、晴清冷、朝無事、厳島禰宜少講義、片岡正占三原人来話ス、隆正門ノ神理学家ナリ、暫時話移晷去ル、近況ヲ聞ク、午後一時過中教院ニ趣ク、神官僧侶若干人ヲ集会シ、例ノ示喩書ヲ讀聞、且讀且話、暫時教院ノ体裁等ヲ詳聞ス、一時半間ニシテ辞帰、両掛行李ヲ賣代ヘ、新ナル柳行李ヲ買フ、價四両二分貳朱ナリ、合羽四十五銭合テ五円ト壱朱百二十五文ナリ、旧行李ヲ賣價二分三朱ナリ、晩雨森精翁ヲ訪フ、暫話、尹ハ一斎翁ノ門生ノ由ナリ、夜例ノ行飯、無事、枕頭書ヲ看ル、鵑聲頻夢ヲ覚ス、國雅夢寐ニ一二首詠タレト皆忘レタリ、雨森精翁ハ原妹尾建三郎ト云シ出雲ノ有名人ナリ

二日、罕晴、清爽朝気可掬、厳島神官禰宜片岡正占来訪、浅野朝興モ亦来、投刺去、午後中教院ヨリ伴来、即赴ク、神官二名ヲ講究ス名別具、晩真宗寺ニ而説教アリ、視察ノ為メ臨席ス、聴衆百人許、夜無事

三日、晴、暁来腹微痛ス、塗薬ヲ擦ス、稍験アルカ如シ、腰脚モ亦未愈、蓐上新聞等ヲ観ル、昨日所借ノ地誌提要ヲ抜萃ス、雨森ニ東ス、他出ト云々、中教院ヘモ東シ試験ヲ促ス、浅野権少教正ヨリ七日ニ試検スヘシト云越タリ、晩訓導僧侶二名来訪、夜微醉早寝、是日地誌提要ヲ略抄ス、原稿ハ頼杏坪ノ著ナリ

四日、晴、爽氣可掬、早起看書、浅野権少教正来訪、暫話辞去ル、今日モ講究一二名アル筈ナリ、午前十時過縣廳ヘ出頭、権令伊達宗興ニ接遇ス、前日ハ巡郡ノ由ナリ、云明後六日上京スト、事務紛冗ナリ、粗教義上保護ノ事ヲ依托シ直ニ辞返ル、新聞紙類十三葉雨森氏江返却ス、地誌并図ハ追テ返ス筈也、午後二時中教院ニテ講究ス、神僧四名ナリ、夜例ノ散歩川辺ヲ繞ル、生洲舟ナトアリ、浪華ノ如シ、納涼ノ况可想、元安川清浅可愛

五日、晴、朝早起、拉児東照廟ヲ拜セントス、市街ヲ離レテ東北行二十丁余、山ニ傍テ稍々石壇ヲ上ル、宏壮ナリ、村落アリ、麦秋男女皆田ニ出テ刈穫ス、帰路小車ヲ命ス、二橋ヲ渡ル、京橋ト云、猿猴橋ト云、水流浅清香魚アリト、午後中教院ニ赴ク、権少講義某西京ヨリ下ル、試ニ説教セシム、余早辞返ル、家書ヲ得ル、云客月三十日東京ヲ発、一家皆無事、清水熊生来寓スト云々、即報書ヲ作リ郵便ニ托ス、十二三日山口ニ在ヘシト云遣ス、夜無事

六日、晴、早起、浅野権少教正ヲ訪フ、水主町新開ノ下邸ニ在リ、元安川ノ流末なり、暫話辞返ル、明日試験午前十時比ト云、雨森氏見訪話談、晷ヲ移シ去ル、太閤征韓ノ時ノ陣觸古文書写巻物借サル、当時ノ事慨想ニ堪ヘス、今日征台ニ比スレハ事簡ニシテ実功アル如シ、夜無事、暁掲燈讀古文書、到毛利輝元韓軍中書翰有感、小田仏乗来

七日、微陰、午前十時過中教院ニ赴ク、権少教正浅野及雨森氏縣吏四名其餘教導職集會す、神僧試補等ノ者七名ヲ試験ス、真宗桑門志道稍辨才アリ、其餘ハ艱兄弟タリ、午後二時過散帰ル、厳島主典小島磯石来訪、明日午十二時厳島へ航スルヲ約ス、又新聞紙ヲ借覧ス、客月廿五七日ノ分ナリ、雨森云、大久保内務卿辞表ヲ上ルト、未確ト云々、夜無事、雨森氏ヲ訪暇乞ス、留守江浅野教正雨森ノ伴来、寒具ヲ贈ラル、雨森ヘハ報トシテ消息紙ト寒具ヲ贈ル、剪燈古文書ヲ写取ス、毛利輝元韓ヨリ國ニ寄スル書アリ、古朴可観

八日、微陰微雨、縣廳ニ至リ参事等ニ暇ヲ告、別ヲナス、又中教院ニ至リ別ヲ告ク、雨森氏等数名来、送別ト云、浅野権少教正昨日試験ノ人名ヲ渡サル、猶本書ハ晩迨ニ送致ノ筈也、午時ノ出途ハ夜ニ

延タリ、小島磯石来、夜半ヲ約ス、閑無事、又廿七八日新聞ヲ観ル、夜分二時比ニヤ小島氏来、急ニ起テ支度シ舟ニ乗ル、逆旅ヘハ此程ノ祝義宿料共ヤル

九日、雨、舟ニテ夜ヲ明ス、本川橋ノ下ナリ、風逆ナリトテ姑ク待、日高シテ纜ヲ解ク、篷窓ヲ掩テ眠ル、西南ノ方ヘ三人ニテ艣ヲ押行、目覚テ見レハ沖ノ方遠嶂島嶼烟雨中ニ模糊タリ、篷ヲ推テ眺望、小島氏借ス所ノ厳島図会ヲ展観シ、且指且問、ツクネ島ト云ハ廣島ト厳島ノ半ニシ而稍廣島ニ近シト云、既ニシテ島嶼浦溆点々皆奇ナリ、応接暇アラス、奇碓双立門闕ノ如キヲ聖島トス、稍海ヲ隔ツル大小島ヲ大ナサビ小ナサビト云、舟移境轉ス、六曲屏ノ如キヲ屏浦ト云、翠松裝綴畫亦不及ナリ、稍夷曠行松アルヲ長濱ト云、小祠ヲ安ス、姪子ト云、僅カニ塔尖ト屋瓦ヲ見ル、云所謂五重塔千畳閣ナリト、便舟悠々港ニ入ル、港上ノ阿波屋忠助ト云逆旅ニ投シ、暫ク憩眠ス、小島氏来ル、此近辺ノ神官僧侶ヲ召会スルヲ謀ル、乃六七名ヲ誘来ル、宿ノ廣間ニ於テ此度ノ旨趣ヲ陳述ス、衆人皆布教ノ挙リカタキヲ云、頃日宮殿営膳ヲ始ム事、極テ煩忙ナリト、飯後千畳閣ニ上リ観ル、海眺極奇厦屋ノ宏壮実ニ愕怡スルニ堪タリ、豊公ノ雄図平相ノ盛挙皆千古英雄ノ所業ナリ、宮殿ヘハ明朝粛拜スルヲ約ス、頭痛岑々タルヲ以テ午睡ス、晩起テ又塔辺磯上ヲ散歩ス、潮稍進マント欲ス、満潮ノ況可想

十日、雨蕭々、晏起、小島磯石来ル、相伴テ本宮ニ詣ツ、神官浄衣ヲ着テ迎フ、先客人殿ヲ拜ス、夫ヨリ本宮ヲ拜シ了テ古文書ヲ拜見ス、天喜年間ヨリ勅文数百通ヲ二帖ニ装潢シタル箱ヲ開ク、古色欝然タリ、一々記ニ暇アラス、代々ノ帝王ノ宸筆モ多シ、就中蒙古弘安ノ勅願等官武トモニアリ、ソレヨリ古器物ヲ拜ス、古楽面多シ、図繪ニ書タル外モアリ、扁額ハ雨天ニテ暗ケレハ見ヘ不分ナリ、名高キ雪舟等ノ画多シ、土佐ノ畫馬尤人口ニ膾炙ス、畢テ宝庫ノ宝器ヲ拜ス、古介冑刀剣ナリ、八幡太郎ノ鎧等ハ稍可疑ニ似タリ、新羅三郎ノ鎧ハ真物ナルヘシ、経文空海ノ理趣経尤目ヲ驚セリ、諸平族ノ肉筆所謂金泥書多シ、亦記ニ堪ヘス、又文庫ヲ観ル、名山蔵ト云額文徴明ノ集字也、二十一史十三経等ノ外、仏書数十部甚僅々タリ、中ニ本朝政典ト題セシ巻物三軸アリ、天保間ノ撰ト云、誰氏ノ撰ヲ知ラス、聖徳太子ノ憲法ヲ初ニ出セリ、晩紅葉谷ヲ観ル、清麗可愛、又座主ノ寺ヲ観ル、弥山ヘ上ル路アリ、山水幽邃殆ント仙境ナリ、晩小島磯石来ル、今夜舟ニテ岩國迄行クトテ舟ヲ買、夜九時比船ヲ発ス、終夜艣ヲ揺ス、呷軌ノ声耳ニ入寝ラレス、夜半碇泊厳島ノ南ヲ離ル、遠カラス、初矢ト云島回スルモノ此ヲ終期トスト、旅泊ノ情況アリ、漁炎遙ニ映帯ス、頗ル詩情有テ詩句ナシ、暁帆ヲ張ル風ナシ、船進マス、既ニシテ岩國新港ニ泊セリト云、蓋睡テ知ラス

十一日、稍霽、逆旅ニ投シ朝飯ス野田屋徳兵衛、小聚落ナリ、復モトノ舟ニテ三田尻マテ行ヲ約シ、小憩シテ纜ヲ解ク、此ヨリノ料三圓一方ト云、錦帯橋ヲ観サルヲ憾ルノミ、此処人力車ナシト云、故ニ舟ヨリ

ス、風緩帆飢テ進カタシ、八九里許行テ由布ノ港ノ前ニ碇泊シ風潮ヲ待ツ、時ニ午後四時過ナリ、無聊甚シ、午睡モ頻数ナレハ倦テ眠ラレス、篷窓ヲ掲テ遠山ヲ眺ル、猶厳島ノ雲端ニ漂渺タルヲ見ル、猶登ラサルヲ悔ルノミ、齎ス所ノ寒具ヲ出シ、且喫且眠ル、晩ニ際シ騒雨一陣(陣)来リ洒ク、舟子之ヲソバヱト云、大畑ノ狭門ト云ニカ、ル、阿ノ鳴門豫ノ八幡ト此ヲ併セテ三大狭門ト云難所ノ由ナリ

大畑の狭門の舟人こゝろせよ　黒髪山に雲さはく也

黒髪山ト云ハ藝ノ内ナリ、大黒小黒ト云峻峯突兀最モ奇ヲ覚フ、退潮ノ勢最モ迅急ナリ、時々大ナル響スルハ潮音ナリト云、夜ニ入雨、暗ク急ニ篷ヲ掩テ躊躇ス、小松ト云大島ノ西側ニ碇泊シ潮ヲ待ツ、遠浦漁火大烟雨中ニ明滅ス、旅泊ノ真況可掬ナリ、夜盖三更目覚テ窓ヲ掲クレハ、雨歇星光粲然、太白当舟山陽詩ノ真景ヲ覚フ、舟子懶眠起シテ舟ヲ遣ルヲ促ス、云潮未タ叶ハスト、又眠余亦就眠

十二日、新霽、暁起人家ヲ観る、小聚落ナリ、纜ヲ解テ櫓ヲ揺ス、再眠夢中ニ過ク、既ニシテ上ノ関ニ近ク鮮魚ヲ買フ、皆活溌ス、以テ午餐ニ供ス、上関人家櫛比亦小繁昌地ト云、此ヲ経テ稍好風生ス、帆ヲ張ル、是日風日尤美、健児モ亦少シク舟ニ馴レテ少モ注意ナシ、島嶼中ヲ経過ス、朝霧出没漁舟ノ景実二佳ナリ、歌仙ノ吟可証、道志ノ口ト云地ヨリ以西ハ潮変シテ東西相反スト、其理如何ヲ知ラス、風益豪、満帆ニ受ケ舩□(缺カ)如箭、舟人皆午睡ス、舟人不語満帆風ト真妙ナリ、午後四時前笠戸ノ岬ヲ過ク、豊ノ姫島ナト正南ニ見ユ、三田尻ノ山見ユ、須臾ニ近ツキテ呼ハ答ント欲ス、可喜々々、日将落比川尻ニ入リ、舟ヲ維キ熊谷(クマソヤ)佐助ト云逆旅ニ投ス、夜風暴

十三日、稍霽ントス、朝八時半此ヲ発ス、小車ヲ命ス、宮市ヲ過リ天満宮ニ詣ツ、石壇数百級宮亦宏荘ナリ、健吉ハ徒ヨリス、此ニテ遇フテ又別ル、宮市街稍繁華ナリ、大川ヲ舟ニテ渡ル、縣ノ物部似淀ニ類ス、村市ヲ経過ス、麦已ニ収メ挿秧方ニ始ル、民家匆忙皆田ニ出ツ、旧縣ニ比スレハ挿秧晩キ事一月強ナリ、山アリ名ヲ聞シカト忘レタリ、平夷ナレト車ハ行カストテ徒歩ス、清水多シ、処々石ニテ函ヲ作リ水畜トス、惣テ石沢山ナリ、石橋ノ足ナキ奇工多シ、岩國ノ錦帯想フヘキナリ、路ノ左右ニ石山ノ崔嵬タルヲ見ル、亦奇ナリ、下ニ釼神社ト云ヲ安ス、一橋ヲ踰テ市街ニ入ル、之ヲ山口トス、立小路上ノ木津屋豊吉ニ宿ル、日已ニ午ヲ過ク、午飯ス、例ノ縣廳ヘ届書遣ス、中教院ヘモ其由ヲ達シ、両三名ニ接セント云、晩世良利貞近藤清石瀧断泥等来晤、粗事ヲ談ス、云明日廳ヘ出ル後院ヘ至り、神官僧侶ノ重立シ者ヘ旨趣ヲ喩スルヘシト、暫シテ辞返ル、夜早寝、福島長吉中属来訪スト云、眠テ知ラス、夜雨

十四日、雨稍霽、暑威已甚、午前九時過世良近藤二姓来、相伴ツテ縣廳ニ出、中属福島長吉ニ接シ粗旨趣ヲ陳フ、権令中野梧一権参事吉田右一ニ面会シ、此度之旨趣一々陳述、教義保護ハ偏ニ地方官ヘ依頼スル意ヲ云、且口演書ヲ示ス、事務多端ノ由ナリ、然トモ教法上ニ就テ稍論説アリ、因テ粗論及ス、権令ハ旧幕人ノ由、吉田参事

ハ当縣人ナリ、暫話移刻、辞返ラントス、近藤芳樹ヲ衙中ニ問フ、一面会ス、七十四ノ老人懇篤可依ナリ、十二時ヲ報スレハ直ニ辞去、午後二時又世良近藤等来、同ク車ヲ命シテ中教院ニ趣ク、後口川ト云溪水前日瀑漲ニテ橋皆落タリト云、家モ顛没セシ処アリト、此處ニテハ近年ナキ洪水也ト云、中教院ハ稍宏壮規畫モ畧備ルニ似タリ、旧大夫ノ邸宅ト云、神官僧侶ノ重立シモノ八九名ニ接シ、ヤカテ廣間ニ召会シ旨趣演説ス、廳吏福島長吉モ来列ス、午後三時過事畢テ又車ヲ命セラル、即寓ニ返ル、晩無事、夜雨滂沱

（挟み込み史料）

「教導職試補

中嶌匡輝」

十五日、朝雨、早起残燈ヲ掲テ新聞ヲ観ル、台湾ニテ去月十八日既ニ戦ヲ開キタリ、即死五人傷者十二人合十七名ト云、世良利貞来訪、暫ク話ス、午後十時比稍霽ル、縣廳ヘ新聞七枚戻シ遣ス、午後偶然中教院ニ至ル、永興寺今北洪川等二三名ノ僧侶ニ遇フ、暫話晷ヲ移ス、茶ヲ点シテ出シナトス、良久世良氏来、云皇学院ニテ今迄待タリト、予ハ世良ノ送迎ヲ煩スヲ恐レテ先ニ此ニ来リシト云ヘハ、大ニ間違ヒタリトテ謝ス、生徒ナト輪講ヲ命セシ由ナレトモ退タリト云、予モ亦大ニ錯会セシヲ謝ス、既ニシテ此ニテ又左傳ノ輪講四人ヲ命ス、皆随分研究セルト見ユ、難詰数回、議論稍可聴、蓋九州習気ノ左傳癖アリ、晩辞返ル、祠官僧侶四五名送来リ、旅寓ニテ遂ニ一酌ヲ命セラル、且飲且談ス、稍胸襟ヲ開ク、近藤清石香川葆晃等其魁ナリ、夜更テ散去、是夜溽暑甚シ

十六日、夜来雨アリ、午前霽ル、朝ヨリ諸人来訪多シ、近藤芳樹モ来訪良久話ス、地誌ノ撰アリト云、頗ル博洽ノ國学家也、本居太(大)平ノ門生トソ、月次集ノ撰モ逐次ニ出スヨシ、拙歌ヲモ出スヘシト促セラル、午後又伊藤老人(無閑)来話ス、縣令ノ教院ニ盡力スルヲ賞誉ス、今北洪川禅海一瀾ノ著書ヲ示サル、義山越溪等数名ノ序跋アリ、儒生ノ為メニ著セシモノト見ユ、経語等三十則ヲ出セリ、晩福島長吉ヲ訪、十八日比返ラン事ヲ云、長云今姑ク留ルヘシト、余山陰ノ梅雨ヲ恐ル、故ニ行ヲ促スルナリ

十七日、陰、細雨絲々、世良利貞見訪、云午後二時中教院試験ヲ行フト、午時迄ハ甚閑ナリ、児健ニ論語ノ講義ヲ授ク、藝ニテ集解本標記ヲ價得タレハナリ、午後二時世良利貞来迎フ、乃神官僧侶五名ヲ試験ス、十一題等ノ問題ナリ、皆相応ニ辨講セリ、平素ノ講習ヲ見ルニ足ル、問難等稍刻ヲ移ス、近藤清石専ラ事ヲ行フ、香川葆晃之ニ次ク、議論蝶々面白シ、畢テ一邸ニ納涼ス、酒ヲ命ス、余辞テ飲マス、強ニ因テ浅酌シ、且話ヲ聴ク、夜諸人又来話ス

十八日、朝晴晩雨、明日此ヲ発セントス、因テ縣廳ニ至リ、権令参事等ニ別ヲ告ク、福島氏里程図等ヲ示サル、徳佐駅ニ宿スヘシト云、凡九里半程ナリ、近藤芳樹モ亦懇々逆旅主人ヲ教ヘラル、今朝

芳樹氏ヲ訪ヒ、國雅ヲ乞ヒ、且米子鹿島某へ翰ヲ托セラル、午後皇学局院ニ至ル、生徒二名ニ神教要旨ヲ講論セシム、議論侃々タリ、亦匪夷所思予良久聴テ辞シ去ル、大和歌ヲ謡ハシメント云、サレド明日ノ支度アレハ帰ル、夜福島近藤世良等来ル、尋テ芳樹来訪、短冊数葉添書等ヲ齎贈ス、掲燈閑話、雷雨滂沱、頗ル客況アリ

　わすれすは思ひも出よほとゝきす　神すさましき五月雨の空

夜更て辞去ル、健児ヲ伴ハシメントスレト辞テ受ケス、甚矍鑠ノ老翁ナリ、有職ニハ高名ノ人物ト云、著述多シ、官服考ヲ著セント云、又月次集ノ撰アリ、余カ歌ヲモ徴セラル、是日永興寺洪川来訪、話緒最濃、尹ハ義山門下ノ一俊僧ト云、余陋撰ヲ示ス、懐ニシ去ル、禅海一瀾ヲ上梓セン事ヲ勧ム

同十九日、夜来雨甚シ、早朝輿丁来ル、云山路最狭隘ト、余亦夜来瀉下ヲ患フルヲ以テ旁々今日ノ発程ヲ緩ニス、明日ヲ期ス、香川葆晃来、一昨ノ試験交名ヲ呈ス、且六條ノ答議二條ヲ申呈ス、痾ヲ護テ睡眠ス、午ニ至テ瀉止ム、食味ハ依然タリ、固ヨリサマテノ事ナシ、世良亦来ル、午後雨益豪、閑寂無聊、児ト修身論ヲ對讀ス、児稍解スル所アルニ似タリ、近藤芳樹ヨリ手簡歌アリ、匆忙之ヲ賡ユ

　今一日雨つゝみして語らへと　降五月雨ハ君かこゝろか

所謂あふふかへしなるもおかし、今日ハ終日客数人来ラス、夜近藤清石世良利貞等来、明朝発程ノ餞別ス、福島長吉モ来別ル、長門下関安徳帝御社格并ニ仲哀帝殯葬地等ノ事ヲ托セラル、暫話辞去、夜大雨沛然、明日ノ発程覚束ナシ

廿日、雨滂沱、発程又期ヲ延フ、近藤芳樹来云、午後暇アラハ来話セヨト、午後二時比芳樹ヲ訪、後口川暴張ス、仮橋危キ程也、暫話、汁粉ナト饗セラル、真渕翁ノ歌軸ヲ出示サル、山陽ノ歌アリ

　遠近の峰ハかつ〳〵暮果てゝ　夕日の残る大ひえのやま

又古鏡一面ヲ示サル、唐ノ物ナリト云、午後四時過辞返ル、稍霽色アリ、晩散歩、今八幡ニ詣ツ、夜果稍霽タリ、明日ハ発足スヘシトテ拮据匆々タリ、夜無事、早寝

同廿一日、微陰早起、此ヲ発セントス、陸運会社云、石州ヘノ途中橋墜タリ通行ナラスト、因テ路ヲ轉シ萩ニ往キ船ヲ買テ石州ヘ航セヨト、乃コレニ従ヒ午前八時後山口ヲ発ス、世良利貞送リ来リ、道々話シ行遂ニ一ノ坂ニカゝル、函嶺ノ東麓ニ似タリ、道々頃日ノ水ニテ家潰レタルアリ、新道ヲ作リタルヨリ水其新ナルニ染入テ洪水ニナレリト云、水道ノ理ハ実ニ争カタキモノ也、所謂所悪於智為其鑿也ト、近時好事者可警、利貞送テ立場迠来ル、固辞シテ別ル、名残尽セスヤ、又遥ニ送リ来ル、豚児ヲシテ止メセシムレトモ肯セス、又虹橋ト云溪橋迠来リ此ニテ分袂ス、離情作悪、余取アエス

　今ハとて別るゝ山のほとゝきす　我にかはりて啼尽してよ

鉛筆ヲ以テ洋紙ニ録シヤル、利貞ノ至懇謝スルニ言ナシ、度々贈物ナトセラル、余ハ旅中ニテ報ユル能ハス、赧然ニ堪ヘス、カクテ道益険峻、天華畑ナト云処最甚シ、果シテ新道ヲ打崩シ水暴張セシ痕アリ、所謂山塩也ト云、路ヲ迂シテ田間ノ畝路ヲツタヒ、竹籠ヲ舎テ草鞋ニテ登ル事十二丁計、険阻云ハカリナシ、余前日腰痛セシヲ

以テ平時ノ如クナラス、サレトモ前日ナレハ思モヨラヌ事也、六間茶屋ト云処ニ小憩ス、旧公ノ輿ヲ休メシ処ト云、山口縣下眼底ニ見ユ、臥蚕状ヲ為、此辺深山老樹欝葱タリ、漸ニシテ峠ニ達ス、又竹輿ニ乗行、稍々下坂、夏木原ヒナセ板橋ナト云地名アリ、午後笹波駅ニ達ス、家五百戸計、山間ノ村駅ニハ随分ヨシ、輿夫道々戦争ノ事ナト話ス、就中正月十六日之戦ハ面白カリシナト云、カノ内輪戦ノ事也、此山ヲ昼夜何十度モ往来シタリト云、此ニテ午飯シ竹輿ハ其侭ニテ又行、川アリ向ニ寺楼見ユ、亦雅致アリ、板橋又山アリ、千枝坂ト云、亦険也、但永カラス、峠ヲ中ノタヲト云、小憩ス、千持茶屋ト云、一升坂ナト云ヲ経テ明ラ木駅ニ下ル、路旁道標アリ、山口ト下関ノ岐ナリ、此ニテ竹輿ヲ代ヘ行、カセカ坂大ヤノ市ナト云ヲ過テ萩ノ旧城下見ユ、亦古諸侯ノ封疆也、明倫堂今ハ半毀チタリ、規模宏大可見、蓮池菁々タリ、市街ニ入リ旧士族ノ家中ヲ過リ、奈加屋ト云逆旅ニ投ス、殆ント疲憊セリ、健吉モイタク疲レタルヨシ、浴後直ニ寝ヌ、余ハ散歩シテ住吉社ノ後ヨリ海辺ニ至ル、薄暮返テ寝ヌ、濱田船来居ルヨシ、明日来筈也

同廿二日、晴、濱田船子永徳丸ノ直八ト云モノ来リ、今夜乗ルヲ約ス、一圓ト云、朝飯後児ヲ拉テ市街ヲ散歩シ、濱先ニ至リ舟船ノ泊処ヲ見ル、咫尺ノ向ニ一小島アリ、又稍向ニ旧城堞アリ、処々角櫓残レリ、聊カ瀉下セシカハ寓ニ返リ午睡ス、午後二時半頃児ヲ拉シテ招魂所ニ詣ル、渡舟ヲ呼テ向ノ島（鶴江）ニ渡ル、一士人ニ遇テ問ヘハ懇ニ指教ス、之ト伴ヒ行、蛋舎蕭條頗ル御疊瀬ニ似タリ、又渡ヲ渡ル、此江ハ二十年前新ニ鑿通セリト云、招魂社ハ小高キ松山ナリ、名ヲ問ヘハ、タカハズ（一ニ前丘）ノ山ト云、祠ノ西側ニ碑碣建ツ、文ハ小田村某撰ス、第一大隊ト第四大隊馬関及ヒ勤王國難ニ死セシ有志ノ名ヲ碑陰ニ記ス、祠前默祷ス、良久慨然タリ、方今開明ノ大業ハ実ニ此輩ノ基業ト云ヘシ

大君の御楯とならむも誓言も　けに違はすの山にそ有ける

南の方島嶼点々、東方ニ浦溆湾ヲナス、画ノ如シ、萩ノ旧城市残ラス見ユ、眺望絶勝ナリ、山ヲ下、又来路ヲ取テ帰ル、永福丸ノ船ニ就テ約ヲ訂ス、北風ヲ催セハ舟出シ難シト云、イツレ今夜来ル筈也、甚覚束ナシ、浴後例ノ散歩シテ寝ヌ

廿三日、晴、朝船風逆ナリトテ出デス、因テ路ヲ海岸ニ取リ陸ヨリ石見ニ往ク、肩輿ヲヤトヒ行ク、橋ヲ渡テ北ヘ行、名古ノ浦ヘ三里半ト云、午飯ス、木与一小漁村ナリ、宇多ヘ一里海濱ナリ、海岸眺望最佳、奇礁乱立、殆ント故國ノ幡郡ニ類セリ、処々挿秧ノ盛ニテ駅々人夫甚乏シク大ニヒマ入後レタリ、午後七時過漸ク物合ト云山間ノ一小村ニ到レリ、此ニテ丁壮ヲヤトハント云ヘト皆山田ニ出タリト云、サキ駅ヘハ大カリ小カリト云名高キ危険アリ、夜ニ入テハ如何トモスヘカラスト、依テ副戸長中屋富蔵方ニ宿ヲ乞ヤトル、挿秧中ニテ太匆忙ナリ、サレトモ山間人ノ朴実甚タ心ヲ尽セリ、幡郡ノ奥ニ彷彿タリ、桃源ノ想アリ、疲憊シヌレハ浴後直ニ寝、暁ニ至漸覚ム、頗ル客況アリ

同廿四日、早起、惣合ヲ発ス、宿料等ヲ贈ルニ固辞再四、漸ニ受、山人ノ老実可想、大カリ小カリ尤険急ナリ、例ノ俵輿ニテ昇キ越ス、絶頂ニ至リ西北海ヲ望ム、極テ佳ナリ、踰果テ須佐駅ナリ、旧長ノ大夫益田ノ旧領ト云、一聚落也、江崎ニ至ル、一店ニテ午飯ス、舟ヲヤトヘトモ漁盛也トテナシ、輿丁大ニヒマ入タリ、遂ニ下、田万ト云ハ十三丁計ナリ、歩シテ至リ、又輿丁ヲ待ツ、甚遅シ、殆ント二時間過ナリ、漸ニシテ三丁壮ヲ得テ例ノ俵ニテカキ行、飯ノ浦ニ至ル頃ハ午後五時計也、此ニテ宿ヲ投ス、袋屋金三郎ト云一小隘屋也、夜漁村ヲ散歩ス、月暈アリ、早寝ス

同廿五日、雨、早起、舟ヲ買ヒ濱田ニ往ントス、逆旅主人周旋ス、價二圓ト云、風順ナリトシテ十三里ノ海路ト云、然ルニ舟子又来云、南風ハ変シ易シ、雨アレハ猶更ナリ、千金ノ御身ナレハ已ムルニ如カス、何分ニモ保シ難シト云、其言尤理アレハ立地ニ議ヲ改テ陸ヨリス、例ノ俵輿モナシト云ヘハ、サラハ徒歩スヘシトテ草鞋竹杖ニテ細雨ヲ衝キ立出ツ、初ハ山腹ヲ行、沙路ニカヽル、深砂脛ヲ没シ殆ト歩ニ艱ム、尤モ名ニ高キ三里ノ沙漠三里歩シテ三里却歩スト云地ナリ、故國ノ安喜新庄ニ比スレハ最モ甚シ、但雨中ニテ少ハ沙堅シト云、波際ヲ歩ス、屢々波浪ニ脛ヲ濡ス、健児ト前後只二人斜風細雨ニ荒濱ヲタトル、尤客愁アリ、西海渺茫無極、大西洋ニモ接スヘシ、地引ト云網引アリ、サコ溌剌亦興アリ、先是小濱ト云一小駅ニテ行李ノ丁夫忽チ行難キヨシ云、実ハネタリト見ユ、副戸長ノ処ニテ壮丁ヲ雇ヒ換テ行ク、既ニシテ高津駅ニ達ス、陸運会社ニテ聞ケハ次ノ益田ヘ行ハ一里計ノ迂路ナリ、且三角迠行カネハ駅夫ナシト云、カノ沙漠ニハ疲レタリ、早ケレド此ニ宿シ、明早発三隅駅マテ通夫ニテ行キ、濱田ヘ達セント、高津川ノ渡口上ナル逆旅ニ投ス、大田屋善八ト云陸運社ノ男甲斐〳〵シク周旋ス、是宿ハ萩已来ノ好駅ナリ、教導職試補中島匡輝同某二名旅宿ヘ呼事ヲ聞ク、人丸社ヘ詣ツ、大社ナリ、奉納歌多シ、亦眺望ヨシ、高津ノ十勝ト云扁額アリ、高角花松上竜燈神籬筆柿鍋島山雪石河鸕飼松嵜石碑社頭筆柿湖水煎茗角浦帰帆、定メテ俗人ノ撰ナルヘケレトモ例ノ奇癖ナレハ録シヌ、是日閑無事也、明朝ハ暁発ナレハ早ク寝ヌ

同廿六日、早起、雨涔々、七時牌高津ヲ発ス、駅下ノ大川ヲ舟ニテ渡ル、高津川ト云ニヤ、磧原曠シ、月夜草数多咲タリ、木邉山半腹ノ山ヲ行ク、八幡川舟渡シ、十田濱ト云ニ出ル、雨甚シ、蛋ノ小屋ニテ肩輿ノモルヲ桐油カケテ防ク、古キ引戸駕籠ニテ窓ヨリ雨モリテ外ニ露坐スル如シ、サレト頃日ノ俵ニ比スレハ太タ勝レリ、津田ニテ小憩、長キ板橋アリ、三四間計、カマデ平原土田岡見ナト云山村ヲ経テ、藤ノ木ト云処ニテ又小憩ス、藤ノ古木アリ、暮春ハ遊人来観ルト云、短冊ナト数多アリ、三隅ノ港ニ入岐路アリ、古市ナト云ヲ歴テ向ノ田ト云小村即三隅ノ向ヒナリ、三隅駅ニ入ル蕭條タル小駅ナレトモ本街道ナリ、旅店ニテ午飯、鯛ヲ焼タルヲ喫ス、陸運社ノ丁夫調ヒカネ甚晩シ、二時半間計待、漸ニシテ来レリ、殆ンド午後三時半也、即此ヲ発ス、岡崎鶴川ナト云ヲ経、皆山ノ半腹路也、東平原ト云ニ小憩ス、折居村八幡社亦大社ナリ、路右ニ大家ア

リ、戸長ト云、西村ナト云ハ尤僻山村也、此辺ニテ日全ク暮レタリ、路泥滑ニ足ヲ受ケス、輿丁甚艱ム、一大江ノ畔ニ出ツ、渡口也、渡ヲ呼ヘハ婦人舟ヲ操リ出ツ、コヽヲ踰レハ周布村ト云、丁夫ナト飯ストテ孤店ニ入ル、猶濱田ヘハ五十丁ノ二里アリ、山坂多ク路泥甚シ、暗夜ニハ尤艱ムト云ヘハ此ニテ一泊ス、急ニ飯ヲ炊ナトサハク、丁夫等ニ聊カ労ヲツクナヒ酒飲マス、漸飯ヲ喫テ寝ヌ、疲レテ熟睡、暁目覚ム泉聲耳ニ響テ再眠ラス、子規聲ハ却テ聞エス、但泉々ノ聒々タルヲ聞クノミ

深山には聲たに聞かす子規　皆世の中に出て啼らん

終夜谷の流ニ枕して　うき世の耳を洗ふ比かな

同廿七日、新霽、早々周布ヲ発、田間ヲ行キ、又山腹ノ径ニカヽル、稍々登ル、降リ果ル処ヲ長濱ト云、一聚落五六百戸許モアルヘシ、一禅寺ニ江湖会ノ標榜アリ、市街ヲ出レハ海濱ナリ、好馬頭海湾ニ小嶼アリ、天神島ト云、又山坂アリ、沢ノカケト云、凡ソ行ク事二里許ニシテ漸ク濱田ニ達ス、宿ヲ夷町ナル宇野屋藤四郎ニ投ス、午前九時半ト云、乃届書ヲ縣廳ヘ出ス、彼ヨリ按内アル由ニテ逆旅ニ待ツ、宿ノ向ニ天満廟アリ、詣ツ、神官等合議所ヲ設ケ、仮ニ集会所ト為スト、乃一二名ヲ呼フ、牛尾弘篤江木栄等来ル、近況ヲ問フ、一昨日物部ノ権宮司佐伯利麿等帰ルト云、縣廳ノ使余リニ晩ケレハ行クニハヤ退衙ニナリシト云、岡本少属ト云ニ接ス、使ノ聞愆ナルヘシ、晩無事、市街等ヲ繞ル、見ルヘキ所ナシ、夜一酌シテ寝ヌ、神官等又数輩来ル、辞ス

廿八日、雨豪、朝九時比縣廳ニ出テ高島士駿ニ接シ、ヤカテ権令佐藤信弘権参事渡部積ニ面会事ヲ談ス、佐藤権令ハ老人ナリ、勘作ト云テ有名人也、管内人皆服スト云、教義モ随分世話スル様子也、午後一時掬翠亭ト云公園ニ神官七八名ヲ会シ、高島士駿モ臨席ニテ例ノ御旨趣ヲ示諭ス、書面ヲ借ランヲ乞、故ニ姑ク許ス、事畢テ寓ニ返ル、神官等送来、又身滌規則ヲ借ス、藤井宗雄ナルモノ来話ス、出雲辺ノ事蹟ヲ詳ニ語ル、稍徴スヘシ、地誌ノ撰ニ与カリテ廳ニ出ル由ナリ、原ハ農夫ニテ皇学ヲ嗜ムト、奇特者ナリ、然ルニ余リ神霊ヲ談スルニ至テハ頗ル厭フヘキヲ覚フ、雲辺ノ地理ヲ問ヒ記ス、夜無事、終夜風甚猛ナリ、中村某江芳樹ヨリノ書藤井ニ托ス

同廿九日、稍霽、八幡ノ旧祠官某来訪、牛尾昨ノ書類ヲ返来、辞去、是日午前九時比又僧侶及残神官ヲ掬翠亭一会スル約ナリ、乃至ル、高島ハ病ニテ会セス、神僧数輩ヲ集会シ、例ノ諭告及ヒ條款ヲ示ス、名別ニ具ス、雨騒ニ至ル、衝雨テ寓ニ返ル、地方官ハ山下権中属会セリ、午後四時比中村大属ヨリ招飲、権令佐藤信弘モ来会シ、且飲且談、皆長人ニテ多年國難等ヲ経歴セシ人物ナリ、大ニ興アリ、主人ハ久シク幽囚ニ苦シミ万死一生ヲ得タリト、極朴実漠ナリ、佐藤権令ハ稍英邁ナリ、六十ニ近キ老翁也、牛荘先生ト云老儒ノ詩畫巻ヲ看ル、甚風韻アリ、高尚可想、主人及権令詩歌ヲ乞、醉ニ乗シ揮洒ス、芳樹ノ添書アレハナリ、晩酩酊辞帰、早睡、不知暁

三十日、雨、早冒雨濱田ヲ発ス、玉島アサ長沢ナト云ヲ過、下郷川

渡船アリ、長田ワタウ庄田等ヲ歴テ、郷田（カウッ）駅ニ達ス、副戸長港屋某袴ニテ迎フ、乃入テ小憩ス、甚丁寧ナリ、飯膳ヲ出ス、辞スレトモ不可、謝義ヲ遣シ飯ス、名高キ郷田川水カサ増テ濁浪洶湧タリ、七十有余里ヲ経テ海ニ入ルト、川幅一里許ト云、舟渡シ三人カヽリ也、渡口ヘ副戸送来、正戸長モ来接ス、渡果テ、三里計、雨ヲ衝テ黒杉村ニ入ル、皆山間ノ僻村、路甚悪シ、黒松ニテ駅夫代ル、福光ナト云処石材最多シ、山ハ白沾土陶ニ作ルヘシ、聊陶器及瓦ヲ製ス、温泉津ノ港亦好馬頭ナリ、石壁削成如シ、温泉津ノ井筒屋ニ投ス、小繁華也、雨歇ム、直ニ主人ヲ導トシテ温泉ニ浴ス、加納屋ト云モノヽ裏ニ去年四月ヨリ新開ノ温泉アリ、和暖可人、暫ク浴シテ逆旅ニ返リ飯シ市街ヲ繞ル、是夜身滌祓ノ祭奠ナリ、家々燈ヲ点シ聊賑ハシ

おもひきやゆの津のさとニみそきして　うき世の垢をけふそゝく

とは

飯後又浴室ニ往テ浴ス、児頃来所謂土佐気ニテ脚痛ス、浴後大ニ疲ヲ覚フ、亦功験也ト云

（明治七年七月）

七月一日、新霽、早起、又浴ス、児ハ否セス、午前九時温泉津ヲ発ス、神破坂ト云ヲ踰ユ、向ニ突兀ノ奇峯疊々タルヲ見ル、所謂石見銀山ナリ、絶頂ニテ小憩、東南ニ遠山見ユ、輿丁ニ問ヘハ備後ナリト云、思ヘハ遠ク繞リ回レル哉、雲ノ杵築モ遥ニ眺ニ入ル、海岸通ナレハ奇蹟モ有ヘキヲ多雨ニテ水暴張セル故ニ山路ヲ取ルナリ、初ノ先觸ニハ磯竹通リトセリ、五十猛命ノ御名ニヨレル地名也トソ、甚遺憾ナリ、清水ト云ニ冷泉アリ、牛田溪水去秋暴張セシ痕アリ、家ナトモ潰壊セリト云、カウロ山急峻ナリ、登ル事十八丁、降リテ銀山街ナリ、処々銀礦ヲ見ル、山中ニハ珎ラシキ屋舎等ナリ、梵刹等モ処々ニ多シ、銀坑近来稍減セリト云、井戸明府碑アリ、アトニテ聞ケハ一斎老師ノ撰文也ト、甚遺憾也、大森駅市街最長シ、亦佳郷、山中ノ一繁華ト云ヘシ、陸運社ニテ小憩、午飯ス、先觸間違シ由ニテ西田村ヘモトセリトソ、城上祠官川北徹蔵来謁ス、佐摩郡ノ吏局アリ、千市村独木橋輿ヲ舎テ歩ス、桜入ト云大岩アリ、一本松ト云ニテ小憩、久里村又駅夫ヲ代、挿秧了テ村民皆醉眠ス、溪水石ヲ穿ツ、殆故山ノ瀑門ニ似タリ、駅夫云、囃田ト云テ牛百頭ヲ五ケ村集マリテ鼓ヲ入テ囃挿秧スト、亦山村ノ一楽事ナルヘシ、捷径ヲ山間ニ取ル、泥滑強甚シ、坂尽テ大溪川、背負テ渡ル、漸ニ川合村ニ入ル、一竹林ノ内、所謂川合國造邸アリシト、今ハ金子氏大ニ衰替セリ、川合部廨舎ニ宿ル、逆旅ト違ヒ甚不自由也、物部社ノ権宮司佐伯利丸等三四名来訪ス、粗教義ヲ談ス、明朝八時福城寺ニ神僧数輩ヲ集会スルヲ約ス、夜浴後直ニ寝ヌ、教会新聞ヲ借覧ス

二日、微陰、早起、九時比佐伯等来迎、乃福城寺ト云浄土寺ニ至ル、神官六七名僧侶ハ三十名例ノ告喩ヲ事トス、喩後直ニ辞シテ此ニ発ス、神官等来送ル、庵原某歌ヲ乞、辞スレトモ不可、即匆々二三首ヲ書与フ、健吉脚痛ニ依テ肩輿ヲ雇ヒ、二人乗行ク、道甚坦ナリ、芳永太田ナト過、小憩ス、駅夫ヲ代、児輿ヲ舎テ歩、刺賀村

処々挿秧已了、休暇ナリ、溪橋ヲ踰テ大湖アリ、サシカノ湖ト云、烟雨濛々畫裏ヲ行カ如シ

吾妹子かねくたれ髪をつけの櫛　さし賀の浦の五月雨の比

ナド口占ス、向ノ一漁村ヲ隔テ北海ナリ、大波ノ時ハ内湖へも潮入ルト云、汀ニ蒲多シ、風致尤可愛、山ヲ繞レハ波根西村ト云、乃宿ヲ投ス、雨瀟々、頗客況アリ、明朝天気ニヨリ、舟行ヲ約ス、宿ハ大田屋某ト云未亡人持也

三日、新霽、曉起、舟子来促、乃港ヨリ舟ニ乗ル、三人之壮丁也、月ヲ戴テ此海ヲ発ス、危礁乱立、頗可観ヲ覚フ、最太嵓壁立ス、高十数丈アリ

おもひきや身ハ老鶴の飛に倦て　羽ねの磯ハの月を見むとは

舟ノ右傍ニ山村アリ、島津也(嵐)ト云、又田気ナト云ハ数百戸ノ小駅ナリ、石雲ノ境山ナリトソ、小村アリ、平衍ノ岡山揺曳シテ縄ヲ引タル様ナリ、是ナン所謂國引ノ時ノ縁故ナリト云、素尊ノ此辺ニテ國内ヲ経営セシヲ國引ト云傳ヘタルヲ、例ノ皇学家実解ヲ做スモ可笑ナリ、北海波甚穏ナリ、鴎群尤多シ

梶枕うきねの床になれ〳〵て　鴎の群の立もさハかす

ナト口号ス、午前九時比風ヨケレハ杵築ノ濱ニ達ス、舟ヲ舍テ市街ニ入、鳥居町大島屋幸兵衛ト云逆旅ニ投ス、直ニ中教院ニ柬シ、神官僧侶一二名ヲ呼フ、中言林伊川某来、明日集会ノ事ヲ命シ、且近況ヲ聞ク、晩神僧等訪来、杵築ノ大社ニ詣ツ、実ニ大社也、旧神官ノ第宅近傍ニ列セリ、皆小侯ノ如シ、過半ハ廃黜セラレタル由、中教院社内ニアリ、乃立寄体裁ヲ一見ス、諸教導職ニ接ス、真宗大谷権少教正随行ノ伊川通玄説教スルヲ聴ク、雨至ル、辞返ル、又三人神官来訪、溽暑甚シ、浴後散歩ス

四日、晴、朝神官僧侶来訪、是日近旁三里以内ノ神官僧侶ヲ中教院ニ集会スルヲ約ス、午前第十時ト定ム、午後ニ至テ漸ク集会ス、乃中教院四神前ニ於テ例ノ通且讀且喩告ス、凡會スルモノ九十八名計遠隔ノ地ハ之ヲ除ク(名別具)、最モ盛ナリ、一時半間ニシテ事畢、旅寓ニ返ル、中言林来話、又諏訪辺三舟等来話、此度権少教正派出巡回ノ不体裁ヲ種々訴フ、詳ニ書取中代理ヘ出セシ由也、余亦随行僧等ノ饒舌頗ル甘心シ難キヲ云、三舟ハ皇学ヲ以テ自任セリ、稍固陋ヲ免カレスト雖トモ精神アリ、是夜祭奠アリ、尤モ厳秘ナリト云、別火氏独リコレヲ行フ、荒塩ヲ扱テ献スル事神代ノ故事ノ如シ、別火氏ハ神世ヨリノ血統ニテ太古コノ祭ヲ司トル者ナリト、猶詳ナルハ畧ス、是夜従前ハ市街ノ鳴物ヲ停メタリト云

同五日、晴、早起、杵築ヲ発セントス、伊川通玄来謁、粗其不体裁ヲ聞シカハ聊カ戒シメリ、路ヲ平田ニ取リ小車ヲ命ス、村落ヲ過ク、多ク名ヲ失ス、路左ノ山ヲ弥山ト云、素尊ヲ祀レリ、常松武志ナト云ヲ過ク、路右ニ大川流アリ、所謂簸川ナリ、此川上ニ琴引山アリ、素尊ノ八股賊ヲ軒(斬)シ処ト云、八谷ナト云アリト車夫語ル、西南ニ峯巒重畳タリ、猶古蹟アリト云、尋ネタケレトモ人ナシ、処々村落小学校ヲ置キ、呀唔ノ声アリ、午前平田駅ニ至ル、田舍ニハ稀

ナル廈屋ナトアリ、一旅店ニ就テ午飯シ、舟ヲ買テ松江ニ航ス、狭キ渠ヲ穿チ行、故郷ノ鹿児大津川ノ如シ、亦幽邃平衍ナリ、処々ニテ行客ヲ招ク、野々崎ニ小駐ス、商客船子等雑載ス、風逆舟進マス、湖面最平曠数万頃、殆ント琶湖ノ看ヲ做ス、遥ニ一聚落ヲ見ル、新庄ト云、一々指点名ヲ聞クニ懶シ、且眠且観、厳島以来ノ絶勝地ナリ、畫工ヲ拉ヘサルヲ憾ルノミ、詩歌ノ情アリテ一句ヲ得ス、児輩モ頻ニ奇勝ヲ歎ス、晩ニ際シ益風逆、湖面平帖如烋、愛河ナト云村落アリ、江水ノ嚙ム処赤土赧然タルアリ、舟子十六禿ト云、此ヨリ松江ハ近シ、日入テ後松江ノ土橋ニ達ス、舟ヲ舍テ杵築屋伊蔵ト云逆旅ニ投ス、浴後寝ニ就、眠テ知ラス

名に高く響聞へし出雲なる　簸の川上の琴引の山

猶アレトモ忘レタリ

同六日、朝晴、晏起、無事、同宿縣吏ヨリ新聞ナト借覧ス、六月廿六七八ノ録ナリ、斯ル処ニテ甚珎奇ヲ覚フ、臺島ノ事居半、支那ノ一難アリ、記サント欲シテ止ム、少属室本閑之輔江東シテ相談セントス、頃日他出不在ト云、因テ縣廳ヘ届按内トシテ一書ヲ遣ス、後承知ノ由報アリ、晩獨歩シテ大橋ヲ越ヘ天神街頭ヲ逍遥ス、菅廟ニ詣ツ、境内臨湖遠眺絶佳ナリ、皈来レハ杵築ノ中言林既ニ茲ニ来リ投宿ス、云舟ニテ只今着タリ、半頃ハ風順、半ハ風逆ナリ、故ニ晩シト云、征南都督ヨリ支那ノ（ブアイセロイ）ヘリトニ贈ル書及ヒ返書ヲ抄録ス、返報書中大ニ違却ノ事アリ、例ノ辨論ヲ着度思フナリ、夜無事、暑甚シ、彗星西北ニ出ツ

同七日、微陰、早起、熊野宮司中村守手同権宮司大野泰来訪、直ニ辞去、庶務ノ内山田権大属大塚少属教義ニ係ル職務ナリト云、試験ノ事十里已内ヲ集会シテ四五日中ニ調ヘハ行フヘシト談シ置、午前九時後縣廳ヘ出、権令井関氏ニ接遇、外ニ寺社掛リニハ遇ハス、六條中一々審問セラル、各疑弁解シ、暫時晷ヲ移シ辞シ去、明日午後一時ヨリ神官僧侶重立シ者ノミヲ会集シ、先主意示談シ度、尓後十里内カ又五里内ノ神僧試験ノ事ヲ期シ、少ニテモ早ク弁スル様依頼ス、午前後ヨリ大風、雨ハ少シ、所謂梅雨ノハヘナルヘシ、無事ナレハ看書、且眠ル、楼旧城ノ下、湖ノ分流ニ臨メリ、南トオホシキ所北也

ともすれハ北を南と思ひけり　南に海を見初てし身ハ

家書ヲ裁シ、郵便ニ付ス、久シク東京ノ書信ヲ得ス、八月中ニハ故郷ニ入ル事アラント云遣ス、晩無事、神官僧侶及権少属大塚杉三等来訪、事ヲ談ス、明日午後一時神僧三里以内ノ者ヲ会於小教院ヲ約ス、権令ヨリノ東ニハ重立シ神官計ト有レトモ人員ヲ増セリ、夜雨蕭々

同八日、大雨滂沱タリ、楼前ノ水濁湧ス、又神官等来訪、午後一時過小教院ヨリ迎来リ、即中大野等ト共ニ往ク、普門院ト云ヲ仮小教院トス、神官僧侶凡六七十名計例ノ通演達、且懇喩シ、又存慮アラハ聞クヘシト云、衆情ヲ開達セシム、日蓮宗権少講義深井日運専ラ言論ス、然レトモ主意分明ナラス、派出随行真宗海老原静観モ亦来会、隠岐國ヘ七宗ヲ入レサル苦情ヲ云、此事ハ既往ノ事ニテ堀権大

録ノ時已ニ云シト云、派出教正ヲ止メシハ故アルヘシ、因州ニテ詮議スヘシト云、暫時談論ヲ聞テ辞出、是日終日雨頻也、湖水稍増、来時ヨリハ尺許モ高キ様ナリ、旧修験仙学院伊達信軦来、何カ歎願書本省ヘ出セリト云々、出向ニテハ願書一切難取次ト云、辞ス、夜無事

同九日、夜来雨頗ル豪、朝ニ至テモ猶然リ、去夏モ洪水アリシトテ人々怕ル、朝無事、論語ヲ讀、大ニ従前ト異ナルヲ覚フ、午前九時冒雨小教院ニ赴ク、神官僧侶群集ス、十四五名ヲ試験ス、尤僧侶ハ川問ニテ僅ニ二人ノミ、名別ニ具ス、三條弁解ナリ、皆々下等ニテ中ニハ試補モ交レリトソ、先三條ノ板講千篇一律ト云ヘシ、併シ皇学ハ講究稍勤メタリト見ユ、流石ニ神地ナルヲ覚フ、三時前了テ寓ニ返ル、湖水殆ント三尺八九寸ニ及フト云、去歳ノ水ニ比スレハ猶卑キ事半扉ナリトソ、晩雨間ニ湖ノ水勢ヲ観ル、湧洶渺茫、壮観ト云ヘシ、亦絶奇ナリ、但終日坐倦スルヲ以テ寓ニ返リ息ス、又神官僧侶等来話ス、応接真ニ憂畦労ナリ、夜無事

同十日、雨益猛、水益溢ル、小教院門前既絶往来、故ヲ以テ今日ノ試験先延引ト云、楼上只洪水ヲ看ルノミ、無聊甚シ、然ルニ此水今少シ増セハ去年ヨリモ洪ナリト、実ニ可怖ナリ、午後僧侶来云、生徒稍集マルモノ空クスヘカラス、末次社ニ於テ随意説教及試験ヲ請フト、乃午後二時比彼コニ至ル、社ノ境内臨湖水渺々タリ、少年輩六名随意説教ス、十四五ヨリ十七八ニ至ル生徒ナリ、皆能セリ、中々大人及ハサル処ナリ名別具、其次ニテ僧侶ノ試験アリ、十名計多クハ少年ニ及ハス、然ルニ未タ試補ニモ至ラサル下等ノ生徒ナリト云、残リハ明日ヲ期スト、即散去、晩初テ霽ヲ放ツ、大橋ニ至リ大水ヲ観ル、水平地ヨリ高キ三尺強ト云、去年ノ大水ニ比スレハ僅ニ一尺計低シト云、晩閑無事、夜半戸外甚騒然、開戸之ヲ窺ヘハ、水漫々トシテ市街多ク燈ヲ焼ク、人家ヘ水押入ト云

同十一日、新霽、早起戸外ノ水ヲ観ルニ昨ニ比スレハ大ニ益タリ、去年ノ水ヨリハ五六寸モ高シト云、然レトモ幸ニ風ナク、且溢水ニテ急ナラス、故ニ処々ノ破損少シト云、午前九時後寺町一浄土寺ニテ僧侶子弟等ヲ試験、随意説教セシム、凡十四名、少年ハ存外ニ好シ、大人ハ否ナリ、午後三時比会散シテ帰ル、大橋々上ニテ室本閑之輔ニ遇フ、遂ニ伴テ旅宿ニ来ル、尹頻リニ黒住派ノ不体裁ヲ説キ、断然禁スヘシト論ス、予寛頗之ヲ弁解ス、壮年鋭気中々受ヌ気色ナリ、一縣ノ論ト普天下ノ事ト其体自カラ別ナリ、甚タ急迫ナルナカレト云、弁刻ヲ移シ去ル、明日此ヲ発セントス、大水ノ故ヲ以テ見合サントス、晩水稍退クト云、夜無事

十二日、快晴、早起、中権大講義杵築ニ帰ル、朝僧侶数輩来訪、以事辞、九時後縣廳江行路、猶水ヲ渡ル舟モアレトモ予ハ褰裳シテ至ル、室本ニ接シ事ヲ談ス、又権令井関盛良ニモ遇、黒住講ノ事ヲ論ス、稍移刻辞去、新聞紙六月念九ヨリ三十日ノ分ヲ示サル、借返ル、是日頻ニ神官僧侶来訪、応接暇アラス、晩散歩中村守手亦来、

叙別、夜無事、安喜（ヤスキ）ノ船頭来、明朝此ヨリ安喜迠ノ船ヲ約ス

十三日、晴、早起、舟子来、大橋ノ本迄行、逆旅主人モ送来、中村守手旧詠ヲ贈ラル、朝八時比松江ヲ発ス、舟洪水ノ名残ニテ太迅速ナリ、水痕猶アリ、暴張想像ニ堪タリ、ダケ山神社左ニ見ユ、バンタ山右ニアリ、遥カニ城跡山ヲ見ル、茶臼山ト云、馬方（マ）ト云津ニテ舟改アリ、ヤカテ安喜（ヤスキ）ニ達シ上陸、午飯ス、乗組雑客五人、一ハ因州ノ旧士族ナリ、此ヨリ又舟ヲ換テ米子ニ航ス、大根島ト云アリ、牡丹名物ト云、弁慶生誕ノ処ト云、今大男某アリ、十二三才ニシテ丈ケ五尺余、四五才ヨリ大人ノ如ク耕作漁業ナトス、甚力アリ、人皆弁慶ノ再来ト云、向ニ伯ノ大山見ユ、此辺眺望尤佳、コレヨリサキコヤ宿山ニ沿テ人家見ユ、八重垣山ナトモ遥ニ見ユ、コヤハイソヤ坂ノ訛ナラント思フ、舟人亦片言雑ノ古傳ヲ話ス、十上山粟島ナト云アリ、暫クシテ米子ニ達ス、岩倉町大森屋ト云逆旅ニ投ス、近藤芳樹ヨリノ添書鹿島氏ヘ達ス、乃郵便所ナリト云、太タ早着ニテ市街ヲ散歩シ、旧城下ナト一見ス、午後二時過ナリ、宿ハ頗ル陋屋也、先觸ナト出ス、惣シテ此辺リ名勝古跡多カルヘシ、問ハント欲シテ人無シ、甚遺憾ナリ、舟客只陣幕ト角抵ノ事ヲ嘖々誇説ス、亦各々ノ智識丈ケ也ト獨笑ス、又清水ノ観音大士ニ詣セン事ヲ勧ム、亦景勝地ト云、欲往而不果、日空シク暮ル、可惜、健児笠ナト買、夜早寝

同十四日、晴、早米子ヲ発ス、例ノ宿駕籠ニテ捷径ヲ取、禅寺ヲ小学校ト為ス、勝田社ヲ過ク、即勝田村ノ郷社也、車尾（クス）村ヲ経テ日野川舟渡シ二流ニ分ル、頃日ノ大水ニ土仮橋落タリト、川幅八丁ト云、急流ニテ大井川富士川ノ如シ、今橋日吉津ナト云村アリ、小憩、佐田村灘村中間ナト云村、木榜ニ記セリ、小波村ノ路右ニ奇岩アリ、例ノ石仏ヲ祭レリ、此辺ヨリ北西ヲ顧ミレハ三穂崎逶迤トシテ其東北ニ幽カニ一黛ノ島アリ、隠岐ノ島前ト云、是日雲烟慥ニ認カタシ、西原タクハナト云地アリ、惣テ此辺ヨリ大山甚近ク見ユ、九時比淀江駅ニ達シ竹輿ヲ換フ、此駅人家稠密小繁華也、今津保田平田此畔秧已ニ青々タリ、二番草最中也、上万末吉國信ナト云村名輿夫云、頗佳名ナリト、福尾冨長ナト云モ同シ、冨長社アリ、何神ニヤ、或ハ地主ノ神ナルヘシ、岩坪小竹ナト云ヲ経テ朽山ノ峠ニテ小憩、鷹尾ト云、倉谷立カケ木料皆登降果テナキ坂路也、御来屋ニテ午飯、鯛生鮮甚美ナリ、赤坂下甲野津日川アリ、此辺ノ溪流ニモ鉄沙多シ、狐塚ト云処ニテ小憩、ヤカテ赤崎宿ニ達ス、日已ニ四時過ナリ、乃宿ヲ冨田屋清太郎ニ投ス、夜微陰ニ而夜半騒雨一過スト

同十五日、晴、早起、例ノ宿輿ニ乗シ赤崎ヲ発ス、漁村ナレト家頗櫛比ス、心太艸ト覚シキ者ヲ乾ス、家々皆是ナリ、云イキスト云海藻ニテ上方ニ送ル酢ニ可ナリト、其外藻スクミルナトモ多シ、鯛ハ麦稈鯛トテ四五月比ヨリ多キ由、今年ハ少シト云、昨ハ少々有リトソ、八橋（ヤハセ）小駅ナリ、菊里ト云村名アリ、彼菊理姫ニ縁ナキニヤ、里ヲ後世サト、訓訛セシニハ非スヤ、溪川多シ、神葬ニセシ塚アリ、此辺或ハ神官之ヲ勧ニヤ、逢束駅ニテ人脚皆代ル、官員ラシキ人竹

輿両掛ニテ来ル、小牧アリ馬五六疋遊ヘリ、樫井川中尾槻下ナト云小村ヲ過、妻波松神ナト云ハ故國ノ岩村山田ノ井筋ニ似タリ、小溝ニ傍テ捷径ヲ行、草綿ニ水ヲ灌ク甚力メタリ、三原ト云ニ豪農アリ、三谷某ト云、松林ヲ穿千濱ニ出、國坂村ニテ小憩

（欄外）路右ニ遙ニ湖ヲ眺ム、周囲三里ト云、名ハ忘レタリ

野津伊能山宇野ナト云僻邑ナリ、路右ノ岩ヨリ冷泉湧出ス、甚清冷也、小憩頻ニ飲ム、今日ハ風ハアレトモ風カケハ炎熱甚シ、宇ノ谷磯ニ蛎多シト云、泊ニテ小憩、是ヨリ先由良ニテ午飯、牡蛎汁甚珎ラシ、天神川舟渡シ、甚廣シ

（欄外）因伯ノ界ハ此辺也

長瀬ニテ小憩、沙漠ノ如キ処ヲ行、浪際ヲ過、潮迫リ来リ甚危シ、此辺ノ濱鉄沙多シ、処ニヨリ沙皆黒シ、淘シテ小森トナシ置クヲ見ル、鉄山多キヲ見ルヘシ、青谷駅ニ達シ宿ヲ投ス、日猶高ケレト暑堪カタケレハ此ニ宿ス、宿南青田ニ望ム、浴後晩涼稍人気生蘇ス、橋崎屋藤八ト云旅店也

十六日、晴、暑甚シ、八時比此ヲ発ス、宿輿全ク窮屈ナレハ朝ノ中歩ス、母木駅ニテ又竹輿ニ乗ル、母木坂上ニ湖アリ、水知ノ湖ト云、明玉命ノ祠アリ、奥澤見ト云、中沢見小沢見ナト云アリ、一漁村ニ憩ス、清泉アリ、コレヨリ海濱ナリ、処々鉄沙多シ、小山ノ湖甚濶大ナリ、景勝地ノ一ト云、小山駅ニ達シ一逆旅ニ投ス、午飯セントスレハ飯ナシト云、即人力車ヲ命シ直チニ鳥取ニ赴ク、小谷甚九郎ト云一豪商ノ家ニ宿ス、主人袴ヲ着テ迎フ、家尤曠シ、従前他國ノ賓客ヲ宿スト云、晩浴後伊吹市太郎来晤、近況ヲ問フ、尹ハ宇部社宮司ニシテ十一等ノ社寺掛ヲ兼、且文部学務ヲモ管セリト云、亦解事人ナリ、夜逆旅主人ニ誘レテ公園ノ内ナル劇場棟俄ニ落タリト云ヲ見ニ往、一楼ニ憩ヒ聊飲ヲ命ス、辞スレトモ不可、是辺酒楼太繁華ナリ、劇棟ノ落タルハ午後五時比ナリト、人傷ハナシト云、児健モ亦若主人ト共ニ見物ニ出

同十七日、晴、暑酷ナリ、朝縣廳ニ出ツ、伊吹氏ニ遇ヒ暫ク事ヲ談シ、権参事黒川某ニ遇ヒ、亦這回ノ旨趣ヲ述ヘ、暫時刻ヲ過ス、午時寓ニ返ル、大雲寺澳光軋来、不遇、晩被命飲、微醺、便眠

同十八日、朝陰、蒸暑甚シ、伊吹氏来話、云今日午後三時比神官僧侶ヲ議事所ニ會セント、例ノ暫く話シ辞ス、午睡ス、午後二時議事所ニ於テ教導職神官僧侶数十人ヲ会シ、例ノ御主意演達シ、且讀且喩ス、稍移晷去、夜市街ヲ散歩ス

同十九日、炎熱倍昨、朝僧侶二三名来る、明日□□議事所ニ於テ試験センヲ約ス、伊吹氏ヘ柬シ、同所ヲ以尓後神官僧侶ノ會議所ト做シ、共同協議セン事ヲ期ス、夜拉児散歩

同廿日、朝土用入ト云、稍涼風ヲ生ス、例ノ神官僧侶来訪、午後三時比議事所ヨリ伴来、即往会ス、地方官少属梶川正温黒川ノ代理トシテ来臨ム、伊吹氏等神官数輩僧侶五十名計会集ス、即試験ヲ始

ム、惣テ試験ノ事ハ未タ挙ケサル様子ナリ、故ニ頗ル苟且法ニ従フ、体裁尤立タス、神官ニテハ湯本文彦一人道不可変ノ説ヲ録セシヲ且讀且講ス、尹ハ儒流ト覚シキ也、僧侶五六名コレモ甚タ体裁立カタシ、講録ヲ讀ムノミ、宝泉寺山本天柱ナル者稍辨才アリ、其余ハ実ニ不足云、日晡前会散ス、夜乗月散歩

同廿一日、晴、暑如昨、閑無事、僧侶三名来遇ス、逆旅主人一奇石ヲ出示ス、所謂霊壁石ト云、去年西京博覧会ニ出セリ、鳩居堂頻ニ賞誉セシト云、書画ヲ掛示サル、菱湖ノ大字最モ可愛、其余東涯淇園栗山等皆可観、畫ハ探幽齋ニテ余等ノ好ニ投セス、黄石顛ト云文人花鳥アリ、主人短冊ヲ乞、即揮洒シ与フ、龍峯寺ノ小教院ヨリ迎来、即往ク、僧侶十数人集居タリ、余示喩ノ文ヲ草セシヲ示ス、且暫ク話シ辞返ル、庭甚閑寂ナリ、宿ニ川田某来飲ム、畫師ナリ、川田作馬同姓ノ人ト云、共ニ飲ム、大ニ醺シ、即眠ニ就ク

同廿二日、晴、朝稍涼気生ス、縣廳江出ツ、伊吹市太郎未タ出テス、佐善元立ト云人ニ遇フテ事ヲ談シ、神官僧侶ニ示喩スル二通ノ書ヲ与ヘ、且北條縣ヘノ掛合ヲモ頼ム、暫ク黒河正治ヲ待テド出サレハ暇乞シテ辞去、後黒河ヨリ書翰来ル、六條ノ請書也、是日無事、天路歴程ナト讀ム、明朝ハ早ニ此ヲ発セントス、逆旅主人送別ノ物ヲ贈ラル、且別杯ヲ命シ、老人ヲ始一家皆出テ觴ヲ賜ハント乞、其意慇懃ナリ、鄙歌ヲ述テ懐ヲ云、余乃之ニ答フ

契あれやいなはの山の峯の松　立別うきけふにも有哉

其餘即吟又旧詠ヲ数首書テ贈ル、醉中又和風長寿犴ノ五大字ヲ書贈ル、老人大ニ喜ヘリ、宿料ハ別ニ賄ノ料ノミヲ受、故ニ菓子料トシテ聊カ贈ル、夜神官僧侶等来、辞テ遇ハス、講録草稿ヲ留テ去、湯本文彦ト云

同廿三日、晴、暑酷シ、早起、拮据匆々、漸日出ニ発ス、主人送テ町端ニ来ル、亦悽惘ノ情アリ、例ノ竹輿ニテ行、知頭街道ナリ、沃田万頃、青秧波濤ノ如シ、古市富安吉成ナト云村落ヲ過ク、叶村ニ小憩ス、國安村ノ辺ヨリ千代川右ニアリ、川ニ沿テ堤上ヲ行、長谷村ノ向フニ古城趾アリ、円通寺村ト云ニ至、小憩、猶朝八時過ナリ、此辺間宿也、脚夫ハ継カス、路傍原野ニ草蟲頻ニ鳴

きり〳〵す汝も暑の苦しとや　風吹ことニ音をのミそ鳴

川上ノ大堤故郷ノ大内辺ニ似タリ、仮板橋ヲ渡ル、凡二ツ皆仙代川也

哀なり雨ニハさらし日ニハ疲　色浅て咲撫子の花

袋川上ノ茶や(屋)皆川ニ傍フ人家清涼ナリ、小憩、釜口六條寺ト云エタ寺アリ、用瀬ニ達シ午飯、香魚已ニ五寸計、山川ノ清味亦可愛、金屋村川上ニアリ、樟原ナト云処老樹欝葱中ニ溪水潺々タリ、川中村ハ尤僻陋ノ山家也、市瀬笹カホキ峻坂ナリ、中島ト云処ニテ小憩、一小坂ヲ繞リテ知頭駅見ユ、是日意外ニ早着ナリ、午後二時過ナルヘシ、午睡ス、浴後門前ヲ歩ス、月色已ニ佳ナリ、逆旅ハ升屋ト云、山駅ニハ尤佳ナリ、炎熱甚シ、然レトモ疲困熟睡ス

同廿四日、早起、知頭ヲ発ス、爽気襲人、亦山間ノ嵐氣ナルヘシ、溪水ニ傍テ西南ス、山根石田長瀬ナト云山邨ヲ過、大坪村慶上村ナト云アリ、皆僻邑ナリ、野原小駅ニテ脚力ヲ継ク、小憩、奥浅野ナト云モ山間ノ小村也、此辺惣テ足指皆仰キ自然ニ高爽ナリ、馬桑坂ニカヽル、危険此辺ノ最第一ト云、高キ事モ亦然リ、最高絶頂ニ登、十三州ヲ見ル、大坂ノ川口ナト分明ナリト云、今ノ峠ハ四方山ニテ何方モ見ヘス、脚夫云、因州ノ内香子山ト云ハ是ナリト、萩ノ花此頃折々咲初タルヲ見ル

萩か花かつ〳〵今朝ハ咲初つ　下には秋の立を知るらん

関本駅ト云山村ニテ脚力ヲ継、且午飯ス、僻陋云ヘカラス、脚夫オソク午後一時ニモ至レリ、山間ノ小村左右名ヲ殊ニス、左ヲ弘岡右ヲ澤村ト云、瀧本村ノ右方ニ瀧熊野社アリ、上町川村ナト云ヲ過キ、新野西村勝（シヤウ）上村ナト云ヲ経ル、此ニ一豪商アリ、説教師ヲ請テ説教セシムト、亦奇特人ノ由、蓮光寺ト云禅侶ニ説教ヲ善スルアリト云、輿夫去年土冦ノ事ヲ話ス、已等モ皆其後ニ随行セシト云、今ハ狐ニ魅セラレタルカ覚メタル心地スト云、近日其巨魁十人計処刑アリシトソ、此辺曠原多シ、日本ヶ野ト云、大小アリ、大ハ四周一里也ト、只芝原ナリ、可惜開墾セサルヲ、輿夫ニ問ヘハ黒墳ニテ作物出来スト云、黒土ニ宜シキ物アルヲ知ラス、且羊牧ニ做ハ大利ヲ起スヘシト思フ也、奈良小駅亦継場也、輿夫オソシ、輿ヲ舍テ徒ニス、二里強ト云ヘト甚遠キ様ナリ、夜八時比漸々北條ニ達シ、京橋ヲ経過、田舍ニハ稀ナル好橋ナリ、京町ノ大笹屋藤次郎ニ投シ、浴後直ニ寝ニ就、夜分下痢一行ス、逆旅ハ城ニ沿隍ニ架セル離座敷ナリ、是日途中微雨一過

同廿五日、陰、微雨、朝瀉下ス、県庁ヘ書通ス、午前十時比県庁江出、参事小野立誠興津（七等カ）実江面会、御旨趣相談ス、六條ノ中皆々承知ノ由、併シ甚擔当ノ景況ハ見ヘス、直ニ辞カヘル、僧侶三名来晤、圓通寺前住権中講義笠道契等ナリ、中教院建立ノ事由等ヲ談ス、且教導職ヲ文部ノ師範学ヘ入ルト云、是日閑無事、微恙ニ依テ出テス、蓐上新聞ヲ観排遣ス

同廿六日、炎熱甚シ、神官黒田成復来話、僧侶モ亦来訪、瀉下未タ已マス、葛湯ヲ製シ頻ニ飲ム、牛肉ヲ買テ少シ喫スレトモ品太悪シ、故ニヤム、飯ハ絶テ喫セス、再熟粥ヲ微ニ食ス、逆旅書肆ヲ兼ヌ、就テ新刻物ヲ観ル、然ニ僅々慊タラス、讀律必携小冊好書ナリ、夜無事、瀉下ナシ

同廿七日、陰、午前八時中教院ヘ出、例ノ神官僧侶ヲ會集シ御主意演達ス、地方官ヨリモ楠見中属臨席ナリ、神僧凡十四五名餘ハ列席ナレトモ名簿出サス、騒雨俄然洒来ス、午前十一時頃旅寓ニ返ル、宝丹ヲ服シ被衾眠、微汗ヲ取ル、絶飯不食、只葛湯ヲ飲ムノミ、鳥取県中教院ヨリ書柬来ル、過日ノ名簿見込朱書講録等ナリ

同廿八日、晴、早起、稍快、瀉僅ニ一行、八時後中教院ヨリ伴来、乃往神官僧侶十七八名ヲ試験ス、後又随意説教ヲ試ム、凡四名（名別具）、

各自相応ノ者無ニ非レトモ惣シテ教義未タ熟セサルニ似タリ、大講義岡道栄ト云真言僧自任セリ、午後四時後会散、寓ニ返ル、地方官ハ葛見中属臨メリ、甲乙ノ見込ハ明朝差出筈ナリ、夜無事、稍快方ナリ、市街ヲ散歩ス

同廿九日、晴、早起、縣庁ヨリ伜来、小野参事ノ請書并神社明細調書面返来、神官僧侶ノ甲乙第冊并講録等持参ス、神官僧侶惣代トシテ別ヲ送ル、九時後此ヲ発ス、小車ヲ命ス、津山ヲ離ル、僅ニ一里計、一方村皿村ナト云アリ、此ニテ車ト竹輿ヲ替フ、高尾村数十戸ノ小村也、福田村山間僻邑也、歌野ニ一富農アリ、此辺溪ニ沿テ行、仮板橋アリ、原田村亀甲石ト云大嵓アリ、故ニ一ニ亀甲ト字ス、小原西幸村此畔昨夏ノ一揆ノ跡ナリ、輿夫コノ話アリ、溪間ニ一冷水アリ、掬飲ス、此辺ニテ子規ヲ聞

友ハ皆都ニ上る子規　何を深山に残り鳴らむ

ナト口占ス、里方村ニ一欝葱ノ杜アリ

蝉の聲あつまる森の下陰ハ　風の外にも涼しかりけり

午後弓削村ニ達シ、逆旅ニテ午飯ス、下仁加村仏教寺ト云大寺アリ、四十七坊モ有ト云、山上ニ塔尖見ユ、宮地村ナト云山際ヲ過ル比、騒雨一陣軽雷ヲ送ル、一人家ニ過リ雨ヲ避ク、一過即晴、上郷中郷下郷ナト云アリ、皆山間ノ小村也、下郷ニ甚長キ土橋アリ、長サ十五六丈モアルヘク見ユ、頗ル畫致アリ、石引山ト云ニカ、ル、稍々険路、峠ヨリハ稍平夷ナリ、踰果テ福後駅也、逆旅久屋某（貞四郎）ニ投ス、午後四時過ナリ、又騒雨一掃ス、浴後即寝ヌ、是處操劇場アリ、雑沓ナリ

同卅日、晴、早起、日出後此ヲ発ス、大川舟渡也、山田之間ヲ行、村名問シカト皆忘レタリ、今朝ハ宿輿ヲ舎テ歩ス、稍々坂路ニカ、ル、稍険シテノシ山ト云峠ニテ小憩ス、下坂尤長シ、又川ヲ渉ル、小魚多シ、金川駅ニテ竹輿ヲ買、乗行小憩、加茂川板橋アリ、水ニ沿テ歩ス、小山村山半腹ヲ行、野々口村ト云、古木亭ト云一雅店アリ、山間ノ田畔ヲ行、飛谷ナト云村アリ、藪際ノ堤上故郷ノ似淀堤ニ似タリ、又大川ヲ渉ル、水右ヲ行小山村山腹ヲ行、中山村ト云、此辺鉄気多シ、二間茶屋ノ近ニ金銀鉄ノ山鑛アリト云、カラカウ坂菅野村又小坂路也、大寺右ノ山中ニアリ、法華ト云備前ノ七里法華トテ甚法華ノ盛ナル処ト云、吉宗村二間茶屋ニテ午飯、横井上村此辺綿花ヲ着甚早シ、半田山暑甚シ、戯ニ

クワン〳〵ト乾堅メタル半田山　此六月ニ照碎クナリ

中江村中原村ナト云処ニテ稍坂尽、北方ト云人家稠密ナリ、岡山ノ町入口ナリ、下ノ丁ニテ福岡吉郎ト云脇本陣ヲ村井真孝サシ宿ナレハ尋ルニ其沙汰ナシト云、乃西隣丸亀屋ト云ニ投ス、蒸気問屋坂口屋来云、蒸気明朝必来ルヘシ、今夜今三番ト云地ヘ出待ヘシト、即急ニ人力ヲ命シ行、薄暮稍達ス、出崎ノ江村故國ノ松背江ニ似タリ、乃宿ヲ投ス、弘運社ト云旗章ヲ立、夜半起テ蒸気船ヲ望ム、寂トシテ音ナシ、月色奇明亦客中ノ一適味

思ひきやきひの濱荻おり敷て　あしの丸屋に月を見むとは

夜暁ニ及ヘト船来ラス

卅一日、晴、早起、朝飯ヲ乞喫ス、八時過果シテ蒸気船来ル、改陵丸ト云、乃乗ル、端舟ハ弘運ヨリ弁セリ、坂口屋聊狡猾ナリ、午後二時過讃ノ多度津ニ達ス、先逆旅ニ投ス、河津屋亀吉ト云、一商船ヲ買テ三濱ニ航セント欲ス、價二両二分ニ約ス、長州人乗組ス、云名東縣ノ官員ニテ帰省スト、晩雨涔々至ル、篷ヲ掩テ港口ニ泊ス、云雨歇メハ即発スト、終夜打篷雨蕭々、頗有旅況、詩思アリト雖トモ詩句ナシ、栗田研介名東縣出仕ノ由、共ニ客況ヲ話ス

（明治七年八月）

八月一日、晏起、篷ヲ掲レハ雨猶歇マス、或ハ陸ニ上ランヲ謀ル、舟子云、雨少歇メハ即発舟ト、因テヤム、菜ノ物ナト買ハシム、壱円ヲ先渡ス、九時前発船、雨歇日光ヲ見ル、里許ニシテ又微雨、篷中猶櫓ヲ揺シ行ク、烟雨中島嶼点々、又佳景也、此中頻ニ経過スレハ一々名ヲ記セス、午飯ス、風少シ生シタリトテ帆ヲ張ル、雨中ナカラ随分走ル事速ナリ、舟中無聊長人ト雑話ス、雨強カラネトモ終日歇マス、午後二時比鞆ノ辺ヲ右ニ見テ行ク、泉水山ナト烟雨中ニ畫ノ如シ、風強ケレハ雨中ナカラ帆ヲ張走ル、インノ島ト云ニ碇泊シ潮ヲ待ツ、上陸シテ浴ヲ乞、一老翁快ク之ヲ許ス、盖舟子ノ親族也、舟子兄弟皆コノ島人ナリ、遂ニコヽニ泊ス、此島周囲七里ト云、島民皆朴実力作ヲ知ルノミ、世ニ器械ノ事アルヲ解セス、夜雨蕭々、郷夢頻ニ驚ク、客情棲然タリ

同二日、夜半後覚テ、篷ヲ掲レハ月色已ニ傾クヲ看ル、船子モ亦船ニ返ル、暁比稍雨歇ムヲ以テ此ヲ発ス、風逆船進マス、所謂マキレ乗ニテ行ク、退潮ノ勢ニマカセテ行事五里許、又舟右ノ一村落ニ碇泊ス、タヽノミノ浦ト云、人戸稠密浴室髪床等アリ、豚児栗田ト共ニ上陸ス、余ハ否セス、山上奇岩処ニ観音大士ヲ安ス、寺モ山腹ニアリ、名ヲ知ラス、西風烈シク、雨且頻リニ至ル、因テ唯飲ノ馬頭ニ夜泊セントス、晩稍霽色ヲ見ル、風亦稍歇ム、因テ又此ヲ発ス、時ニ午後三時過ナリ、一寸上陸散歩ス、河田某ト云一富商アリ、剃師ヲ呼テ髭ヲ剃ラシム、漁船ノ帰ニ遇フテ生鯛三尾ヲ買、皆活溌飛動ス、晩餐ヲ助ケシム、亦一興ナリ、午後三時過此ヲ発ス、風逆マキレ乗ニテ行、右ノ山ニ人家一簇アリ、キノヘト云、此ニ至テ風乍チ歇ム、因テ此ニ碇泊ス

三日、朝早起、雨猶已マス、キノヱヲ発シ擄ヲ揺シテ大木ノ狭門ト云ヲコキ抜ク、退潮ニ乗スル故ニ風ハ逆ナレトモ舟進ム、午前十時比御手洗浦ニ抵リ馬頭ニ碇泊ス、宇和神社ノ賽日五日ノ内ト云、港内注目縄ヲ張リ竹ナト立賑ハシ、亦小繁華ト云ヘシ、栗田生豚児等ハ上陸シテ浴シ返ル、斯テアルヘキニアラネハ隣船ナト出ルニ伴テ舟ヲ出ス、洋中又風雨ニ逢雨益豪、篷間モリテ坐スル処ナシ、舟中傘ヲ擁シテ一処ニヨリ呻吟ス、詑（ママ）シサ云ハカリナシ、然レトモ入ルヘキ港ナケレハ如何トモスヘカラス、大ヱヒト云山ノ小カケニ一船碇泊スルヲ見ル、因テ又櫓ヲ揺シテ此ニ碇泊ス、風雨益猛烈、所謂カヽソナト云縄ヲ出シ船ヲ維キ漸ニ留ル、午後三時稍天晴ントス、小蝉ノ吟スルヲ聞ケハ晴ヲ報スル也ト舟子等喜フ

かしましと思ふ物から夕蝉の　晴を告るハ嬉しかりけり

晩天霽矣、然レトモ西風烈シク潮逆ナレハ舟出シ難シ、遂ニ此ニ泊ス、夜例ノ長人ト話ス、夜半篷ヲ掲クレハ月色午ニ当ル、果天晴ナリ、可喜

同四日、新霽、暁起、舟子ヲ起シ舟ヲ出サシム、風ナシ擄ヲ以テ豫山ニ近ク乗ル、日出ヲ観ル、朝霞曖曖タリ、是日ノ天色モ亦可怪

いさり火ハ影幽にも焚さして　波より白む浦の明ほの

焚すてし海士あくた火幾度か　水島灘を往来せしかな

イツキノ灘ト云ヲ過ルトテ

いつしかニいつきの灘も過ニけり　いよの湯桁の数をよみつゝ

鹿島ト云樹欝葱タリ、故山ノ佐賀ナルモ同形同名ナリ、漁舟ヲ呼テ生鯛ヲ買、午飯ス、鮮味尤美ナリ、午後一時風歇潮逆ナリ、又碇泊シテ風潮ヲ待ツ、二時比又微雨一過ス、所謂ソバエナルヘシ、暫シテ又帆ヲ張リテマキレ乗レトモ三ヶ濱ヘハ回リカタシト云ヘハ、向ノ堀江ト云処ヘ舟ヲ寄セ、遂ニ上陸シ人力二挺ヲ買、二人共ニ駕シテ愛媛縣ニ馳ス、道甚平坦ナリ、一里三十一丁ト云、薄暮前市街ニ入ル、大岩平吾高知屋ト云逆旅ニ投シ、浴後寝ニ就ク、疲倦シテ快眠ス

同五日、陰時ニ微雨、朝縣廳ヘ柬ス、九時過該廳ヘ出頭シ、庶務石原権中属青野清夫ニ面会シ、粗事ヲ談シ、即参事江木某権参事大久保親彦康直等ニ会シ、委曲ヲ談判ス、黒住講社ニ付本省ヘ伺シ処不被及沙汰ノ令アリトテ不平ノ色アリ、明後七日神官僧侶ノ重立者召会スル事ヲ談ス、中教院ヘ其由云遣シ彼ヨリ来談ノ筈ナレハ辞返ル、午後二時前神官僧侶両名来ル、右ノ事談、弥明後七日午後一時神僧ヲ教院ニ集会シ例ノ演舌ノ筈ナリ、尤近傍重立モノノミヲ先召集ル約也、是日縣廳ニ於テ家書ヲ得ル、七月十八日出ナリ、一家平安無事、可喜、晩堀ノ書翰木村庸ヘ豚児ニ為持遣ス、木村庸来訪、暫話移刻、信競ヨリモ来書アリ、宿ヲ借サント云、依テ投宿ヲ約ス、権少講義武市寛吏ト云モ来、共ニ夜ニ入迨話ス、暑気堪カタシ、夜尤モ甚シ

同六日、晴、朝稍涼気アリ、朝木邨庸ヨリ伴来、即行李ヲ車ニテ送ラシ、余ハ木邨忠二郎ト云迎ノ者ト共ニ彼宅ニ移ル、健吉ハ逆旅ノ賃銭ナト払ヒアトヨリ来ル、萱街二丁ノ角屋敷ニテ最モ廣シ、書院ヲ借テ旅寓トス、大ニ安堵シ殆ント家ニ帰ルカ如シ、主人モ洒落人ニテ甚気安シ、例ノ神官僧侶数輩来訪ス、午後ヨリ忠次郎ト共ニ三人車ヲ命シ温泉ニ浴ス、凡ソ三十丁計ナリ、一楼ニ休息シ、ヤカテ浴衣ナト借テ浴室ニ行ク、一二三下等ノ四品ニ別ツ、第一等ニ浴ス、稍熱ヲ覚フ、洋人分析ナト経シトキ些熱ニ過クト云シトソ、頻リニ浴シ疲憊ヲ覚ヘケレハ二階ニテ暫時休ス、暑熱ヲ洗フニハ最良策ナリ、一度ニテ先已メ本ノ楼ニ返リ憩ス、楼山ニ際シ清涼ナリ、山陽ノ自畫賛ノ額アリ、山水極メテ凡ナラス、暫ク午眠ナトシ鮓ヲ喫シ茶ヲ飲、雨又来ラントスレハ乃車ヲ命シテ返ル、健吉忠次郎ナトハ散歩シテ後ヨリ帰来、晩又来人多シ、夜小酌、就寝、目覚テ愛媛面影ト云地理書ヲ讀ム、亦臥遊ナリ、此地名勝多シ、例ノ遊志勃

然タリ

同七日、朝晴、家書ヲ作リ此間ノ報ヲ郵便ニ付ス、潮江ヘハ今少シ見合セテ遣ス筈ナリ、午後一時中教院ヨリ迎来、即往ク、縣吏ハ石原権中属ハ差閊ニテ等外和田某来ル、神官四十一二名僧侶三十四五名集会ス（名別具）、例ノ告喩條款ヲ懇説ス、衆皆承諾甘受セシ様子ナリ、喩後モ猶例ノ老婆心ヲ絮叨ス、晩酌ヲ命セラル、辞スレトモ不可、余極メテ飲マス、半井梧菴川端某等倍飲、且談且飲亦一適ナリ、夜盖十時後客散

同八日、猶雨全ク晴レス、風時化ノ模様也、午前十時比教院ヨリ迎来、即往、縣廳ヨリモ石原樸権中属一少年某来臨ス、神官僧侶十二人ヲ試験ス、盖従前地方官等ノ試験ハ今日ヲ始トスト見ユ（名別具）、列席左右ニ神僧取締試験掛ヲ置、夫々配役アリ、粗体裁備具スト云、生徒聴衆最多シ、晩例ノ飲ヲ命ス、予固辞シ、且瀉下ノ病ヲ以テ早ク辞返ル、夜宿主人話、夜更テ就眠、是夜下痢已ム、例ノ葛湯等ノミ、最飲食ヲ慎メリ

同九日、未霽、南風最猛盖半時化ト云、午前九時過教院ヨリ迎来、即臨席ス、縣吏石原権中属等外青野某先立、十一時前試験ヲ始ム、是日ハ昨ニ倍シ三十名計也、多ク昨ヨリハ皆可ナリ、衆大ニ競進ス、喜フヘシ、然ニ終日苦熱中事ヲ行殆ント倦困ニ堪ヘス、余昨来病疲ヲ以猶更也、晩衆ト共ニ飲ム、且話且飲、稍和睦愉快ヲ極ム、地方官モ甚教義ヲ喜フ色アリ、夜命車帰ル、夜早寝ヌ、昨日ノ等及付ヲ三輪田教正ヨリ送来ル

同十日、稍新霽穏ナリ、早起、今朝ハ七時揃ト云ヘトモ九時比迎来、即往臨ム、是日ノ試験凡四十名計（名別具）、晩ニ際シ漸了ス、聴衆亦夥シ、夜無事

同十一日、晴、朝九時比ヨリ説教、僧侶二名神官一名、最初三輪田少教正三則教憲ヲ棒讀ス、続テ神官説教ス、聴衆甚多シ、凡千三四百人ト云（人数調別具）、午後漸了、会散後道後温泉ニ浴セント縣吏石原中属等外青野某木村庸等ト命車並馳、頻ニ浴シ、浴後一楼ニ飲ム、妓来杯ヲ侑ム、石原等頻ニ余ニ歌ヲ乞、即短冊数葉ヲ醉ニ乗シテ揮毫ス、晩興尽タリ、即命車寓ニ返ル、火已ニ点セリ、明朝出途セントテ拮据匆忙ナリ、人々稍々来訪ス

同十二日、晴、暑甚シ、朝八時過該縣ヲ離ル、主人木村庸亦高知縣ニ行カントス、乃チ伴ヲ約シ余ハ竹輿ヲ命ス、主人所謂引戸ヲ勧ム、盖主人ノ什物ナリ、市街ヲ離レテ板橋アリ、此ヨリ郊外ナリ、西南田間ヲ行ク、井手口ト云ニテ午飯ス、木村生ハ此マテ小車ニテ道ヲ殊ニシテ来会ス、先在、尹ハ此ヨリ馬ヲ賃シテ行、余カ行李ヲ両傍ニ着ケ行ク、稍々坂路、名ヲ聞ケトモ忘レタリ、既ニシテ山ニカヽル、登ニ稍険、真坂ト云、歌アレトモ忘ル、雨ヲ釀シ雷聲アリ、山容稍奇ナリ、峠ニ達シ北顧スレハ人家皆臥蠶トナル、海嶼モ

亦点々畫ノ如シ、暫ク憩ヒ又行ク、下坂半ヲ過キテ雨至ル、晩五時過久万山ニ達シ、久万町ノ逆旅俵屋山内義茂ニ投ス、山駅ニハ随分人戸稠密ナリ、小繁華ト云ヘシ

同十三日、晴、早起、九時後宿ヲ発ス、駅東ヨリ策ヲ変シ、用居通リヲヤメ、七鳥通高山踰ヨリ直ニ川口ニ到ラントス、人夫ノ中ニ一人（高知中須賀人金助ト云）、是道ヲ諳ンス、餘ハ皆知ラスト云、然レトモ價ヲ貪テ皆承諾ス、高山ニカヽル処々名ヲ問ヒ、且問且記ス、一々之ヲ鉛筆ニテ洋紙ニ記ス、一山半腹ノ農家ニ小憩午飯ス、ヒデ村ト云、是辺惣テ黍ノミヲ食シ米ヲ食ハス、一年僅ニ米ヲ食フ事二三次ニ過キスト、其深山既ニ如是、人足等酒ヲ貪テ長憩ス、ソレヨリ又坂路益急ナリ、一峠ニ至リ此処ヨリ嶺ツタヒニテアサフノ池ト云処ニ至ル、山上一池アリ、残飯ヲ出シ且喫シ水ヲ飲ミ小憩ス、暑甚シ、汗流テ雨ノ如シ、高山ノ七鳥ニカヽル、路甚狭ニシテ薄高萱生茂リ、道々頻ニ放吟ス、僅ニ一ヲ記ス

小男鹿ニあらぬものから萩薄　胸わけかぬるけふのくるしさ

既ニシテ日暮ニ迫レリ、地蔵峠ト云、稍憩テ又行、竹輿麁ニシテ毎々落セリ、危険且艱苦云計ナシ、行吟哭ニ代ルモノ衝口テ発ス（洋紙ニ記セシアリ）、七鳥村ノ内何トカ云山ニ至ル、深山老木交加欝葱タリ、日已ニ全ク沈ミ前後行クヘキナク、進退維谷、サレトモ暗中ニ猶捉シテ行、数丁一溪水ノ辺ニ至テ必至ト行クヘカラス、衆火ヲ出シ松明ヲ製セントシ枯枝等ヲ集ム、雨ニ潤ヒテ火付カス、辛フシテ鞋ヲ崩シ笠ヲ焼テ少シク火ヲ吹着タレトモ続カサレハ燃ヘ付カス、不可奈何、於是予思ヒ出シ洋紙ヲ以テ火ニ接スルニ乍チ燃出ツ、頻ニ之ヲ行フテ竟ニ一日抄ヲ焚尽ヤリ、村名吟哦等皆一炬火トナル

旅の恥かきすさみてし水莖の（流し）　あともなきまで焚尽しつる

且憾且笑、亦焚火稿ノ実ヲ見ル、漸ニシテ松明ヲ製シ、竹輿ノ板ヲ割キ火ヲ点ス、之ヲ力ニテ又行ク、道狭隘古木怪岩或ハ道ナキカト疑、又ハ路ヲ誤ルカト、只高知人ノ此苦ニ至ラシムルヲ罵ル、漸ニシテ水ヶ塔大師堂ト云ニタトリ着ク、飢疲交至ル、一歩モ歩スヘカラス、因テ辻堂ニテ野宿ノ策ニ決シ、火ヲ焼テ徹夜セントス、予ハ堂中僅カニ三尺計ナル戸内ニ臥ス、鞠躬曲臥窮屈云ヘカラス、然レトモ疲憊ニ堪ヘサレハ忽寝ニ就キ、夢中只山間ヲ跋渉スルヲ覚フルノミ、暁ニ至微ニ鶏聲ヲ聞クカ如シ、乃驚起脚夫等ヲ呼起ス

忘れすよ深山の奥の草枕　結ひし夢の現なりとは

又例ノ戯吟

南無大師我も諸國の巡回者　一夜宿かせ昔語らむ

猶道々ノ放吟村名等ハ宵ノ焼棄テシ洋紙日記ニテ一時ノ烟トナレリケレハ憶起スルニ由ナシ

旅のはちかきて捨てゝしも塩草　けふりとなしてあかす夜ハかな

同十四日、晴、黎明山野露宿ヲ立出ツ、脚夫皆飢テ起能ハス、種々苦情アリ、行一里計猶山ヲ離レス、山間溪底白雲巨海ノ如シ、又行一里計、漸ニシテ川口村ノ入口ニタトリ着、隅田亀吉ト云問屋ニテ飯ヲ炊キモラヒ食ス、漸人心地ツキ力ヲ得テ、川口ニ至リ船ニ乗ラントス、谷生台湾ヨリ帰ルニ邂逅シ、共ニ同船ヲ約シ、午前十一時

比纜ヲ解ク、津口尤危険、水頃来ノ雨ニテ猶水多張ル、道々奇巖絶壁、畫ケル蜀峡図ノ如シ、叫奇不措、湧洶波濤中ヲ軽舟ヲ操ル神ノ如シ、二三里計ハ一瞬間ニ馳過ク、駅キ事箭ノ如シ

（欄外書込）

舟ノヘサキニ付タルカヒヲメツポウカヒト名ク

一々名ヲ問ヘト随問随忘、只絶壁ノ頭上ニ落ルヲ覚ルノミ、越智村ニ至リ此ヨリ稍溪流穏、波境亦奇ナラス、舟中佐川ノ横倉障子嶽等ヲ望ム、実ニ不可得ノ奇ナリ、山陽山陰ヲ経過シ尽セシカ如此奇境ニ遇ハズ、三時間計ニシテ伊野ニ近ツク、午後五時過伊野ニ達シ、舟ヲ舎テ市店ニ入飯ス、是ヨリ四人馬ヲ賃シテ行、日既ニ黒ク山路泥濘不可行、且往来人馬多ク路狭ニシテ馬頻ニ驚ク、余十五六年来馬上セス、殆ント窮セリ、神内村ニテ燈ヲ乞テ稍穏ナリ、馬荒シ、九時過比岸切ニ到リ馬ヲ下ル、云頃日洪水ニ橋落タリト、長縄手劇場ノ前ニテ人力車ヲ命シ、江ノ口西森ニ投ス、妹氏寝タルヲ呼起シ、寝ヌ

小車のめくり〳〵て今宵しも　小津江口ニ宿りけるかな

十五日、晴、晏起、大藪生来訪、粗近況ヲ聞ク、本町通ヲ経、旧士族ノ家多ク店ヲ開ク、一桑滄ノ感アリ、掛川街ニ過リ、姉氏ヲ省ス、大ニ喜ヒ玉ヘリ、姪輩皆旧ヲ話、夫ヨリ潮江ニ至リ、弟正路ヲ叩ク、弟未タ官ヨリ退カス、暫ク待ツ、午後二時帰来、久濶ヲ話シ飲ヲ命セラル、且飲且話、晩露臺ニテ頻ニ旧ヲ話ス、真ニ夢中ノ如シ、夜醉眠

心あてに詠めし筆の峯の松　昔の色ハかはらさりけり

十六日、晴、在潮江、健吉ヲ江口ニ遣シ、行李中ノ物ヲ取来ラシム、豚児ヲシテ木村庸ヲ本町旅宿ニ訪ハシム、云近日帰ルト、午後余亦之ヲ訪ヒ暫話ス、山本玄敬亦来、今晩誘テ倶ニ城東ヲ歩ス、小車ヲ命シ新地ニ到リ一楼ニ飲ム、夜又命車、帰宿潮江

十七日、晴、早起、布師田ニ行、比島ヨリ児ト共ニ同車ニテ行、澤田ニ投ス、姪女大ニ驚ク、古本等調ラヘ晩墓ニ展ス、弘瀬生小松生等来、命飲微醺、例ノ醉眠、土券ノ事丈ハ話ス、十銭八厘入用ト云

斧の柄の朽し處を尋ても　昔の人ニ逢よしもかな

くりかへし昔恋しく思ふかな　かつらき山の森の下蔭

十八日、早起、詣産神、於二階古書捜索ス、拙著易類等取調ヘ、午後命車帰、過江口、晩酌初松魚ヲ喫ス、是日暑甚シ、殆九十三度ニ上ルト云、宿潮江

十九日、晴、早起、作家書、欲付郵便、無事、晩酌後弟ト共ニ新地ニ散歩ス、途ニシテ妹及健児ニ遇フ、相拉テ劇場ニ往、入テ観、岩見十左衛門ノ事ヲ演ス、大率田舎漢ナリ、夜半劇散、即潮江ニ返ル、鶏聲数々ヲ聞

二十日、陰、晏起、昨日ノ郵便未遣、即今日出ス、梅原生来訪、教

院近況ヲ聴ク、尾越権中属客月十日着、同十一日神官僧侶ヲ会ス、翌十二日速ニ此ヲ発ス、僧輩追ヘトモ不及、八月七日藤並宮ニテ神僧四五十名ヲ会シ会議ス、十七日又会ス、凡教員二十三名計ト云々、暫話移晷、辞去、晩無事、豚児江口ヨリ来、夜微醺、潮江ニ宿、風雨徹暁

廿一日、風雨益豪ナリ、潮江ニ在リ看書排遣ス、午後二時稍霽、島本百郎ヲ朝倉街ノ寓ニ訪フ、不在、直ニ去テ伊藤善平ヲ訪フ、暫話辞去テ林有造ノ僑居ヲ尋ヌ、新街井手端ニアリ邂逅、談話近況ヲ聞ク、話スル事二時間ニシテ辞去、藤崎尚絅ヲ訪、旅宿ノ事ヲ頼ム、又山本安太郎ヲ廿代ニ訪ヒ、直ニ辞去テ江口ニ往カントス、廿代橋北ニテ坂崎耕芸ニ値フ、即懇留、命飲暫話ス、座客アリ善談ス、尹ハ余ヲ知レトモ余ハ名ヲ知ラス、夜江口ニ宿ス

廿二日、雨、江口ニ在リ、豚児ノ為メニ旅宿ヲ尋ヌ、谷兼右ヲ訪フ、直ニ寓ニ反ル、小松信治来訪、云小津ノ武市八十衛ノ跡ヲ借寓ス、因テ豚児モ共ニ寓センヲ謀ルニ許サル、、即宿寓ヲ約ス、晩命車、掛川町ニ往、山本庵ニ宿ス、命飲、夜無事、夜半晴

廿三日、新霽早起、田中生来訪、云東行ノ志アリト、潮江ニ過ル、豚児先在無事、擁書閑過ス、晩豚児江口ヨリ帰ル、云西姪今日舟ニテ東京ヨリ帰縣スト、夜無事、雨蕭々

廿四日、微雨、在潮江、西姪来云、本月十二日東京ヲ発、舟出戻シ、因テ遅延スト、書信ヲ得ル、云一家皆無事、健吉商社江行、云長持大九円中六円小四円四十銭、単司モ之ニ準ス

廿五日、雨、早起、布山ニ行ント欲スレトモ泥行ヲ奈何トモセス、晩稍霽ル、是日新嘗祭、新地ノ向玄夫島邊江神行ス、潮江小姪ヲ拉テ往ク、士女雑沓青柳橋ヲ渡リ、小一宮ニ至リ、行宮ヲ拜ス、云今日蒸気船平安丸発ス、該縣権令岩崎長武及萩原生等東京ニ行ト、此船帰来ノ比余亦此ヲ発セントス、因テ同僚小中邨清矩ニ柬シ、少々日期ノ延フヲ断リヤル

廿六日、微陰、豚児ヲ布山ニ遣ス、余ハ風邪ニテ行カス、沸剤ヲ飲テ蒸掩汗ヲ取、島本生堀内生等来訪、暫話ス、無事、終日不出、夜坐露臺、月色朦朧

廿七日、稍霽、午前十時許、児布山ヨリ帰ル、云既ニ行李ヲ理ス、書籍反故紙等ナリ、鉄炮丁田中氏迫舟ニテ送致スト、晩田中氏ヘ往キ、健吉ト與ニ葛籠ヲシハリ、チワ湿キヲ製ス、初ハ長持ナリシカ田中ニテ古葛籠ニ換ヘタリ、書籍機道具紡車等ヲ入ル、存外ニ収リタリ、田中氏ヘ少々贈物ス、今朝田中季弟直次東京江行クト云、民蔵帯下ニテ平臥ス、夜江口ヘ廻リ、潮江ヘ返リ宿ス

廿八日、晴、朝無事、上町新築同宗奥宮正方ヘ往ク、不在、直ニ辞

返ル、大橋通リ旧況殆変セリ、真如寺毀テリ、潮江ニ返ル、市川氏へ行訪、潮江近隣へ来レリ、夜月色奇明、露臺ニテ飲ヲ命セラル

契あれハわか潮江の柳かけ　澄月影を又も見る哉

廿九日、微雨、朝小山生来訪、事ヲ論ス、終事無事、豚児等松魚節ヲ買来ル、一貫目ニ付二圓ト云、晩雨、稍霽、弟ト共ニ島本百郎ノ招飲ニ趣ク、種崎街ノ一楼ナリ、夜月色絶佳、且飲且談、十時後辞去、潮江ニ宿ス

三十日、新霽、無事、梅原生来訪、稍刻ヲ移シ去、寒具ヲ贈ラル、江口ヘ行行李ヲ調ラヘ掛川町ヘ迫ヤル、健吉共ナリ、夜潮江ニ宿ス、是日新聞ヲ看、八月廿一二日分ナリ、一説ニ云、人有テ魯公使二人ヲ斬ルト、或云青森縣士族ナリト、巷説紛々タリ、縣ノ出張所ヨリ風便ニ告来ルトモ云、未タ虚実ヲ知ラスト雖トモ極メテ國家ノ一大事ヲ誤ル者ハ此挙ナリ、支那戦ノ事モコレニテ水泡トナルノミナラス大禍ヲ醸成セシナリ、暴生ノ誤事今ニ始メヌトハ云ナカラ怕ルヘキノ極ナリ、夜西姪来話

三十一日、朝晴、掛川町ニ往キ、行李ヲ理シ、農人町ニ送致ス、両掛一荷ナリ、新町ヨリモ駄荷一ツ積ム筈ナリ、新町ヘ往田中生ヲ訪、不在、八杉正直ヲ訪、暫話辞去、実事神道ヲ奉ス、余私ニ有説、夜弟及妹婦等ヲ拉テ新地ニ遊フ、児女ノ劇音ヲ聞ク、夜半潮江ニ返、是日平安丸着

（明治七年九月）

九月一日、晴、秋風、初涼可掬、拮据終日、明日乗船ノ筈、姪布山ヨリ来別ヲ送ル、屋瓦ヲ葺修スト、價一円半余、即付ス、工人樽屋鉄蔵也、晩二姪来ル、乃餞別離杯ヲ酌、書数葉ヲ揮毫シ興ヲ遣ル、夜涼、臺上ニテ乗醉、又旧作ヲ録シ弟ニ付与ス、移刻皆散去、健吉船券買来、價四円半ト云

同二日、晴、暁起火ヲ点シテ蓐食、拮据事ヲ理ス、汽船午前八時発ト云、匆々行李ヲ理シ、六時後潮江弟ノ許ヲ離ル、弟姪及ヒ健吉等ト小舟ヲ菜園場ニ買ヒ、送テ本船ニ至ル（平安丸ト号ス）、巣山ノ南ニアリ、於此弟姪児等ト別ル、亦悽惘ナキ能ハス、児ハ此行暫ク郷ニ留テ入校遊学スル為メニ従ハス、所謂並等ノ局ニ入ル、雑沓可厭、甲板ニ上レハ二三識人ニ遇フ、真鍋金子松木下元西邨等ナリ、最モ郷人多シ、江元父子モアリ、時ニ午前七時三十分ナリ、斯クテ荷積了テ十一時四十五分浦戸ヲ発ス、海面拭カ如ク、船駛キ飛カ如シ、須臾ニ東灘浦溆ヲ経過ス、甲板上ニテ西村源吉ト頻リニ旧ヲ話ス、源吉当時浪華ニ僑居、商法ヲ為ス、又下元氏ト話ス、嘗テ近藤芳樹翁ノ致声ヲ傳フ、云即僕ノ師ナリ、嚮ニ在京ノ時頻リニ其門ニ出入シ、朝夕吟哦ニ伴ヘリト、因テ種々話熟シ殆ント郷土ニ在ルカ如シ、且座穏ニシテ船ノアルヲ忘ル、日将ニ晡ナラントスル比、阿波ノ泊リニ至ル、夜猶甲板ニ在テ納涼ス、更深シテ船底ニ入睡ル、夢中猶諸州ヲ繞ルヲ覚フ

三日、晴、人云既ニ浪華ニ近ツキタリト、起テ暁色ヲ看ル、盖四時過キナリ、既ニシテ港口ニ入ル、黎明後例ノ端舟ヲ買テ浪華長堀ニ入ル、堀江六丁目大和屋嘉兵衛ニ投シ、朝餐ス、甚早着ナリ、逆旅主人ハ嘗テ一昨冬家人等宿レリト云、真情アリ、午前九時過予独リ春日載陽氏ヲ訪ハントテ街ニ出ツ、心斉橋稍異様ノ欄干ナリ、例ノ書肆骨董ヲ捜リツ、行、遂ニ小車ヲ命シ、今橋通ニ到リ春日氏ヲ訪、喜テ相迎、時ニ病客雑然、主人閑ニ乗シ酒ヲ命シ、且飲且話ス、余頻リニ東京ニ往カン事ヲ勧ムレトモ主人肯ハス、云児ノ為メニ嫁ヲモロフト、山口ノ小野石齊ノ女ナリト、余因テ忠告ス、家人大ニ喜フ、主人予カ為メニ治療ヲヤメ、子息ヲシテ代診ニ出テシム、例ノ席上唱和ノ詩歌アリ、予去春ノ偶作ヲ示ス、忍黙因縁猶未了、老婆心切更無功ノ句アリ、載陽即其韻ヲ和シ、兼テ獨園老師ニ寄懐スルノ詩ヲ賦ス、余亦賡和ス、皆遣忘セリ

　逢見ての後のこゝろを今そしる　昔しハ物を思はさりしと

午後三時半比辞シ返ル、寓ニ帰レハ下元氏柬ヲ留ム、云今日劇ニ扶桑丸浪華ヲ発ス、因テ君ヲ待能ハス、即之ニ乗シ去ルト、予甚タ残念ナレトモ奈何トモスヘカラス、晩三菱商社ノ小使来云、扶桑丸今夜猶神戸ニ碇泊ス、明朝早ク神戸ニ至ラハ猶及フヘシト、仍テ券ヲ買價五円半、因堅約ス、夜市街ヲ散歩シ物ヲ買フ、早ク寝ヌ

四日、晴、早起、匆々小車ヲ命シ、川蒸気ノ運上所ニ至ラントス、商社伴云、郷人ノ乗残レル三人アリト、即共ニス、江元某父子ト川上某ナリ、共ニ税関ニ至リ、鷲丸ト云小汽船ニ乗シ神戸ニ至ル、時ニ午前十時四十四五分ナリ、港ニモ入ラス直チニ本船ニ小舟ニテ乗着ク、下元氏ニ遇フ、互ニ愕然奇遇ヲ歎ス、下元歌アリ、昨日逆旅ニ遺シオケリ

　難波潟しはし別るゝ沖津波　隅田の川瀬ニとく返りてよ

余亦例ノ即吟

　姑したゝ別ハうしと沖津浪　立かへり来し心しりきや

ト戯ル、本船積荷甚多ク、大ニ刻ヲ費シ出テス、遂ニ夜ニ入リ八時錨ヲ抽キ此ヲ発ス、船底眠テ知ラス

五日、陰、船紀灘ヲ過ク、風頗ル逆、船進カタシ、人々多ク注意アリ、既ニシテ風濤大ニ起ル、予亦注意アリ、船底ニ堅臥シテ動カス、午後二時過船飄兀頻ナリ、云遠洋ニ近クト、時ニ雨聲一騒然、風亦之ニ随テ狂ス、伸吟中忽前年ノ詩ヲ和ス、此是頃日潮江弟ノ許ニ在テ餞別セシ時席上各毫ヲ揮フ、予懐弟ノ旧作ヲ書テ弟ニ似ス、因ニ此情味ニ及フ

白髪共驚難弟兄、對床是日両茫々、江湖艱[諸]福予輸汝、如個風涛七度洋

猶歌数首、例ノ放吟セシカト皆忘レタリ、舟中僧アリ、叡岳ノ瀧某ト云、大講義タリト、亦韻語ヲ解ス、下元氏モ頗ル歌詩ヲ善ス、頻ニ戯レニ狂吟ヲ唱和シ排ヲ遣ル、皆一時排悶ノ諧劇記スルニ堪ヘス、僅ニ一班ヲ記ス

瀧某

長髯先生術最先、水昌城裏壇閑権、不知掌領金多少、羨尓釣夷別

品船　　下元功

航海妙術鍼為先、長髯占得磁鍼権、一種別有鉄鍼大、今霄欲刺新造船

無名氏

我醉渾忘後与先、一鞭羨汝鍼有権、笑他逢源左右手、不乗一船失両船　有注今略

此等ノ狂吟ヲ以テ殆ト注病ヲ医ス、亦船中一部膝栗毛ト云ヘシ

六日、風雨益豪猛、夜来遠洋ニ掛ル、固ヨリ波濤茫々四方ヲ弁セス、船漂兀益甚シ、一船多注ス、嘔吐ノ声頗ル厭フヘシ、予亦遂ニ一二嘔ス、然ルニ昨午餐ヨリ一粒食ヲ絶ス、故ニ吐スルニ物ナシ、只胆汁ノ苦酸ナルヲ覚フルノミ、終日懊悩ス、昨日ノ諧劇モ亦寂トシテ趾ナシ、各頭ニ手ヲ加ヘ相見テ顔色ナシ、雨豪ナレハ甲板ニ上ル能ハス、且篷窓ヲ閉息シ殆ント空気ヲ窒ス、舟子為メニ一小窓ヲ拓ス、始テ蘇息スルカ如シ、既ニシテ雨稍歇ム、急ニ甲板ニ上ル、連巒近ニ在リ、盖函嶺豆山也、岳蓮ハ一瓣ヲ見ス、此行コレヲ憾ム、人々横濱ニ近ツクヲ喜フ、時ニ日且昏ントス、雨亦至ル、稍クニシテ午後八時前濱ニ近キ馬頭沖ニ碇泊ス、急ニ小舟ヲ買テ揚陸シ、河新ニ投ス、浴後晩餐、少ク酒ヲ命シ、小車ヲ買、汽車舘ニ赴ク、下元氏ハ明早朝発スト云、因テ訣別ス、下元旅寓本郷傘谷金助丁五十六番下元実敏ノ宅ナリト、夜十時汽車発ス、須臾ニ馳過、十一時前新橋ステイシヨンニ達シ、小車ヲ雇ヒ下谷ノ旧寓ニ帰ル、家人驚喜相迎フ、夜盖十二時ニ近シ、情話紛々殆眠ル能ハス、暁ニ徹シ一睡ス、是夜児カ同僚谷伊藤二生来宿

落染る桐の一葉の雨雫　静けき窓ニ帰り来ニけり

七日、晴、晏起、午前九時車ニテ本省ニ出、帰京ノ届ス、小中村等ニ遇フ、云磯村尾越等両三輩帰来、其餘山田齋藤等ハ未タ帰ラスト、暑中休暇ニテ多ク出省ナシ、宍戸大輔モ出省セス、早ク辞返ル、晩濱田八束来賀、小酌ヲ命ス、微醺、浴後直ニ寝ニ付、夜雨豪風モ亦烈ナリ

八日、稍晴、冷気アリ、例ノ三日休暇ヲ賜フ、閑無事、雑書ヲ翻閲シテ悶ヲ排ス、午後一時比ヨリ劇音ヲ聴ク、長女ヲ拉シテ晩池邊ヲ繞リ散策ス、雨岑々至ル、急ニ帰ル、夜獨酌微醺、不忍ノ池荷猶盛ナリ

篠筈の池のこゝろの花蓮　濁りニ染まぬ色香妙なり

九日、微陰、無事、書信ヲ潮江弟ヘ寄ス、又中橋へも一書ヲ遣ス鶴女ヨリ

（以下欠）

参考

（表紙）
「明治七年
輜廻紀行ノ附属物
逆旅日録
五月　奥宮正由」

記

一、廿五銭
五月十四日夜二人泊飯□（代カ）二戸ツ、賄十五朝迄
右之通慥ニ受取申候
五月十五日　廣□勘兵衛（印）

五月十七日　備中笠岡
三宅佐平次（印）

一、九十三銭
五月十五日ゟ十七日迄飯代、前々外入用候の代、正ニ請取申候、已上
備中笠岡槌屋
五月廿七日　源治郎（印）

一、弐朱九拾銭
右者五月十七日ゟ廿七日迄御飯料代、正ニ請取申候也
五月廿九日　尾道町

一、四拾四銭　栗原屋佐介（印）
右ハ五月廿八日御旅籠代、此ニ受取申候
廣嶋弐丁目
吉川金蔵（印）

五月廿九日夜ゟ六月九日迄
六月九日昼より十日夜カ
一、宮ノ原
坂本忠助（印）

六月十日　岩國

一、野田徳兵衛（印）
周防三田尻
熊谷佐助

六月十二日

一、金弐拾六銭
但御旅籠代御貳人様

右之通正ニ受取申候、已上
六月十三日

一、
六月十三日昼ゟ同二十一日迄御泊リ御旅籠代御弐人様分
右之通受取申候、已上
防州山口
六月二十一日　木津屋豊□（吉カ）（印）

六月廿一日ゟ同廿三日迄御弐人様御泊リ
一、金五拾弐銭
御省行
右之通リ慥ニ受取申候
荘西田町角　中屋富蔵（印）

一、金三拾銭
但御旅籠代ニシテ
右慥ニ受取申候也
野々村
六月廿四日　茂川藤兵衛（印）

一、金弐拾弐銭
但弐人ハタコ代
右之通慥ニ受取候也
六月廿五日　袋屋金三郎

覚
六月廿五日
一、金三拾銭
御泊リ弐人前
右之通リ慥ニ受取申候、以上
高津太田屋
善八（印）

記
一、百弐銭　二人泊リ
但六月廿七日ゟ廿九日、三十日昼迄
右之通リ正ニ請取奉申上候也
濱田縣下町
蝦子町
佐々木藤四郎（印）

一、金弐拾六銭
二人御泊リ
右之通請取申候
七月朔日

温泉津ノ町　多田勝□（印）

記

一、金三拾銭

七月一日夕ゟ二日御昼迄御上下御両人御賄六ツ料

右之通正ニ受取候也

七月二日　川合郡　役處

一、金弐朱也

二人泊リ

右之通正ニ受取申候也

七月三日　波根　大田屋

杵築

大嶋屋幸兵衛（印）

同三日ゟ

一、金五拾銭　御両人様弐泊リ

右之通正ニ請取申上候、以上

七月五日

記

一、金弐円四十銭　御宿料

但七月五日ヨリ同十三日昼飯迄

御二方様

右正ニ御請取奉申上候也

島根縣下片原町

七月十三日　新宮榮蔵（印）

一、弐拾四銭　御宿弐人

但シ七月十三日泊リ

右之通リ正ニ受取申上候、已上

岩倉町　大森屋（印）

覺

一、弐拾四銭　御宿料弐人様分

但シ七月十四日泊リ

右之通正ニ受取申候

鳥取縣下赤崎宿

佐伯保二（印）

覚

一、廿六銭　御宿料

右之通リ慥ニ受取申上候

青屋

はし崎屋

七月十五日　藤八（印）

記

一、金三円六拾八銭六りん

七月十六日昼ゟ廿三日朝迄御賄料

右之通リ正ニ請取申上候也

戌七月廿二日　　鳥取縣下

小谷甚九郎（印）

島根縣ゟ鳥取縣迄里数三十一里八丁ト相成事、十一月十九日加藤氏江云

記

一、三拾銭　　弐人様御旅籠

一、四銭　　右御弁當代

〆三拾四銭

右之通リ正ニ受取申上候也

智頭宿

升□（屋カ）　善七郎（印）

第七月廿三日

七月廿四日より

同　廿九日朝迄

右之通御滞留被□（遊カ）候、以上

七月廿八日　津山旅店

京町　草賀藤治郎

一、六拾銭　同月四日ゟ同六日迄御宿料二人分

八月四日

一、三拾二銭　人力賃　御取かへ

六日

一、三銭五厘　人力賃

一、弐銭六厘　御酒料

〆九十八銭壱厘

右之通正ニ御請取申上候

愛媛縣下

大岩平吾（印）

八月六日

記

一、八月十二日暮十三日朝迄御両人様御止宿相成申候也

七年八月十三日　愛媛縣下

山内義茂（印）